

第6章 第29次調査（学生支援センター改修地点）

第1節 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

1959年に建設された学生支援センター（旧蔵本会館）の改修工事に伴い、建物の西側と南側にて発掘調査を行う必要性が生じた。

本調査地点周辺では、1983年に実施した第2次調査（体育館新営地点）において、古代の東西大溝、水路、掘立柱建物、庄内式期から布留式期の竪穴住居、弥生時代中期後葉の方形周溝墓が検出されている。また、1995年に実施した第14次調査（医薬資源教育研究センター新営地点）では近世の農耕関連遺構のほか、古墳時代の溝や土師器、弥生時代と考えられる柱穴や鉄器などが検出された。

本調査地点においても弥生時代から古代の遺構が検出される可能性が高いと考えられたため、発掘調査を実施した。調査面積は555 m²である。



第74図 調査風景

a 南区（西から） b 溝32掘り下げ（東から）

2. 調査体制と期間

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・中村 豊）

調査担当 中村 豊

遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）

山口雄治（埋蔵文化財調査室・特任助教）

調査補助 板東美幸、古川裕美、前田千夏（以上、施設マネジメント部・技術補佐員）

調査期間 2012年10月31日～2013年2月5日

3. 調査地点の位置と区割り

(1) 調査地点の位置

遺跡の所在地は、徳島市庄町1丁目78番地の1である。本学蔵本キャンパスの西側中央付近にあたり、第2次調査地点(体育館新営地点)の約50m北、第14次調査地点(医薬資源教育研究センター新営地点)の約25m南に位置する。

(2) 調査地点の区割り

本調査地点は学生支援センター(旧蔵本会館)の増築部分に相当する。南東区、南区、西区の3つの調査区を設定した(第75図)。南東区は南北約7m・東西約29m、南区は南北約7m・東西約40m、西区は南北約15m・東西約5.5mである。

4. 調査の概要

本調査地点では、3つの遺構面を設定し、弥生時代Ⅰ－2様式から近世にわたる遺構を確認した。出土遺物は少なく、コンテナで土器3箱、石器1箱、合計4箱である。以下、遺構面ごとにその概要を述べる。

(1) 第3遺構面

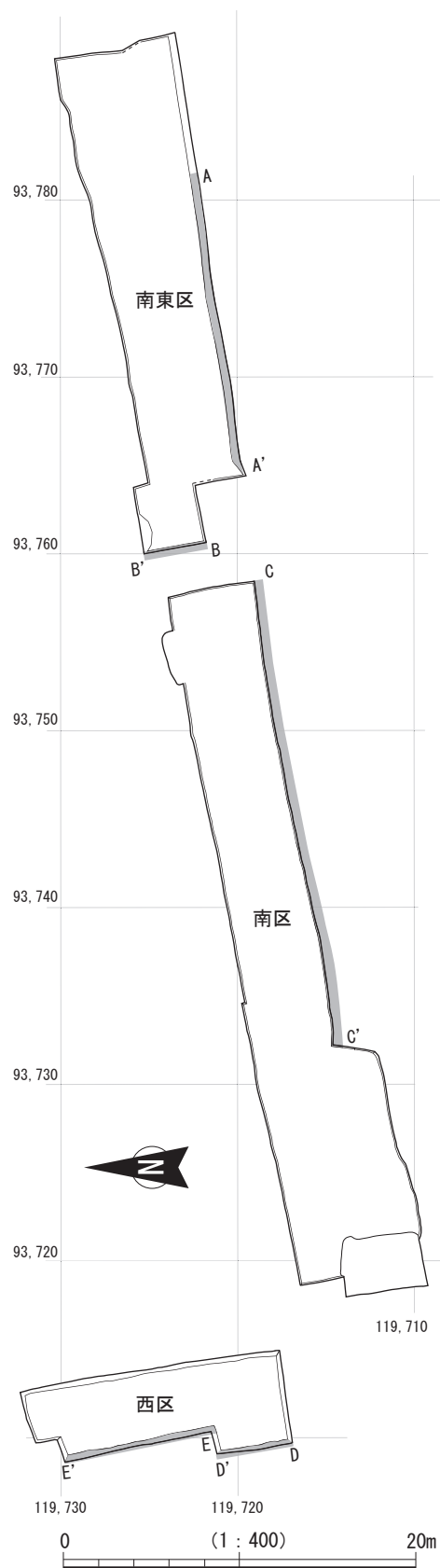
弥生時代Ⅰ－2～3・4様式の用水路と考えられる溝を確認した。

(2) 第2遺構面

古代の掘立柱建物を検出した。ほかに、弥生時代Ⅰ－3・4様式～近世の一時期と考えられる溝、土坑などを検出した。

(3) 第1遺構面

近世の溝1条が検出された。



第75図 調査区の区割りと土層断面の位置

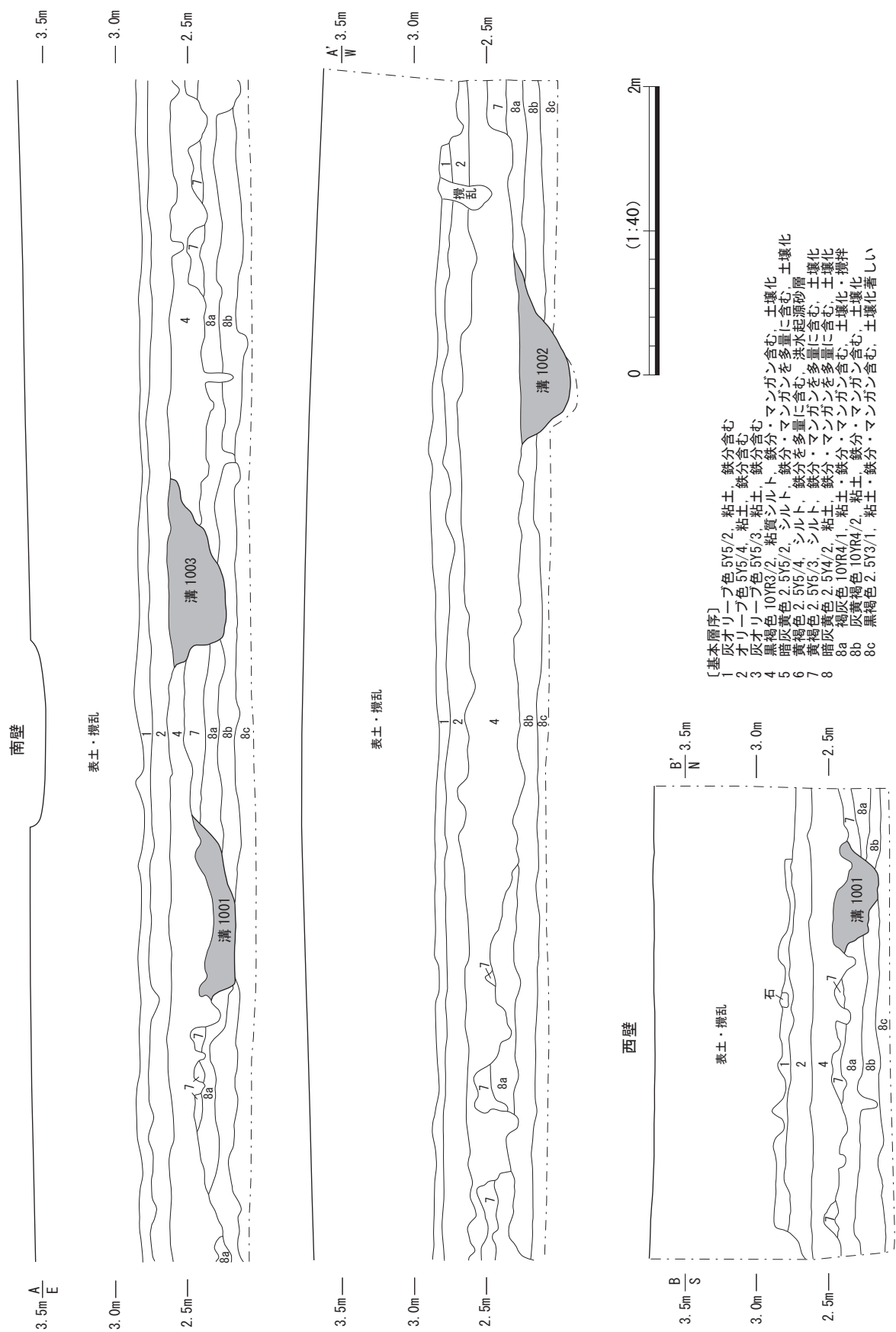
第2節 調査成果

1. 基本層序

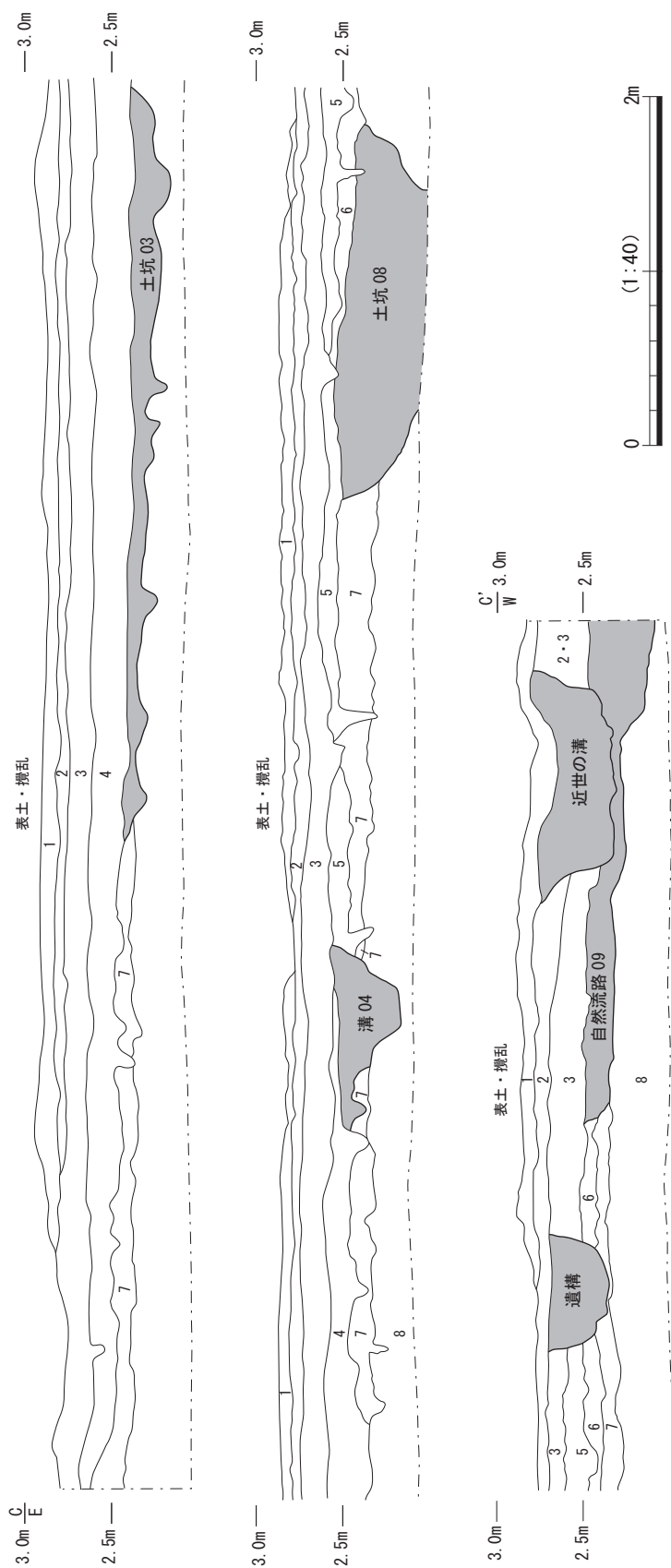
本調査地点では、南東区南壁・西壁、南区南壁、西区西壁の土層断面を実測し、これを第76～78図に示している。基本層序は1～8層であり、南区南壁土層断面(第77図)をもとに説明を行う。なお、現地表面は標高3.7mであり、そこから標高2.7～2.9mまでは近代以降の造成土である。

- 1層 灰オリーブ色 5Y5/2 の粘土で鉄分を含む。上面の標高は2.9m、厚さ10～15cmである。近代の水田層と考えられる。
- 2層 オリーブ色 5Y5/4 の粘土で鉄分を含む。上面の標高は2.8m、厚さ10cmである。近世の水田層と考えられる。
- 3層 灰オリーブ色 5Y5/3 の粘土で鉄分を含む。上面の標高は2.7m、厚さ20cmである。近世の水田層と考えられる。
- 4層 黒褐色 10YR3/2 の粘質シルトで鉄分・マンガンを含む。土壌化する。南区の東側から南東区にかけて堆積している。上面の標高は2.6m、厚さ5～20cmである。
- 5層 暗灰黄色 2.5Y5/2 のシルトで鉄分・マンガンを多量に含む。土壌化する。上面の標高は2.6m、厚さ10～20cmである。調査地点全体の西半、つまり南区の西側（第77図）から西区（第78図）にかけて確認される。弥生時代Ⅰ－3・4様式～中世の層と考えられる。
- 6層 基本的に7層と同層であり、南区西半(第77図)では2層に分層できたため、上層を6層とした。黄褐色 2.5Y5/4 のシルトで鉄分を多量に含む。上面の標高は2.5m、厚さ10cmである。洪水起源砂層で一部に土壌化した部分がみられる。既往の調査成果から、弥生時代Ⅰ－2～3・4様式に形成されたと考えられる。
- 7層 黄褐色 2.5Y5/3 のシルトで鉄分・マンガンを多量に含む。上面の標高は2.4～2.6m、厚さ10～20cmである。洪水起源砂層である。本調査地点のほぼ全域で確認され、弥生時代Ⅰ－3・4様式の土器が出土している（第107図）。既往の調査成果から、弥生時代Ⅰ－2～3・4様式に形成されたと考えられる。
- 8層 暗灰黄色 2.5Y4/2 の粘土で鉄分・マンガンを多量に含む。上面の標高は2.3～2.5m、厚さ30cm以上である。南東区（第76図）では色調と土壌化程度から、a～c層に細分している。既往の調査では、本層上面から弥生時代Ⅰ－1・2様式の遺構が検出されている。

基本的には、1層上面を第1遺構面、6・7層上面を第2遺構面、8層上面を第3遺構面と設定し、調査を行った。ただし、土層の堆積状況が地区によって異なるため、実際の検出面については遺構ごとに詳述した。



第76図 南東区南壁A-A'・西壁B-B'土層断面

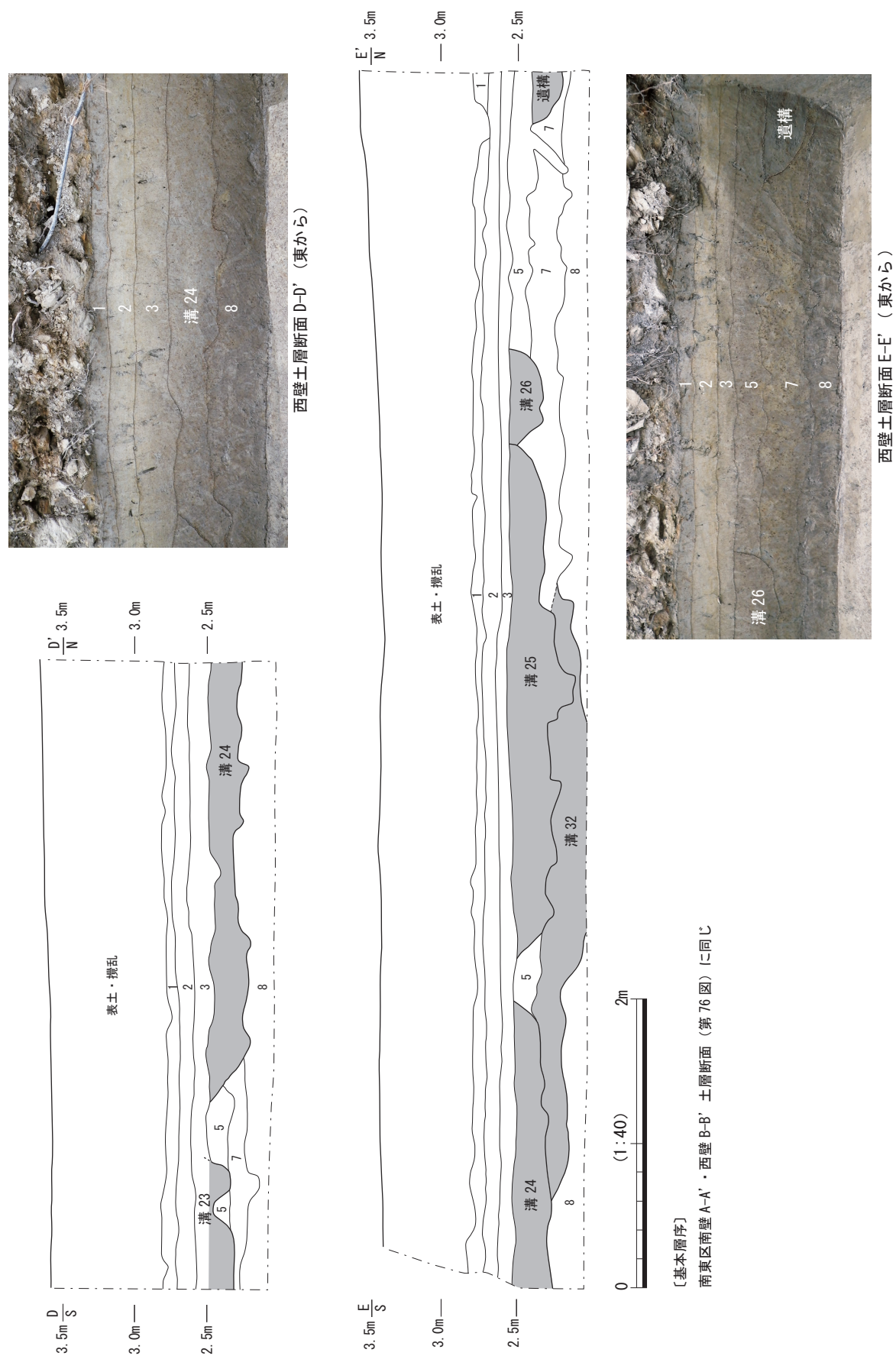


〔基本層序〕
南東区南壁 A-A'・西壁 B-B' 土層断面 (第76図) に同じ



南壁断面 C-C' (北から)

第77図 南区南壁 C-C' 土層断面



2. 第3遺構面の遺構と遺物

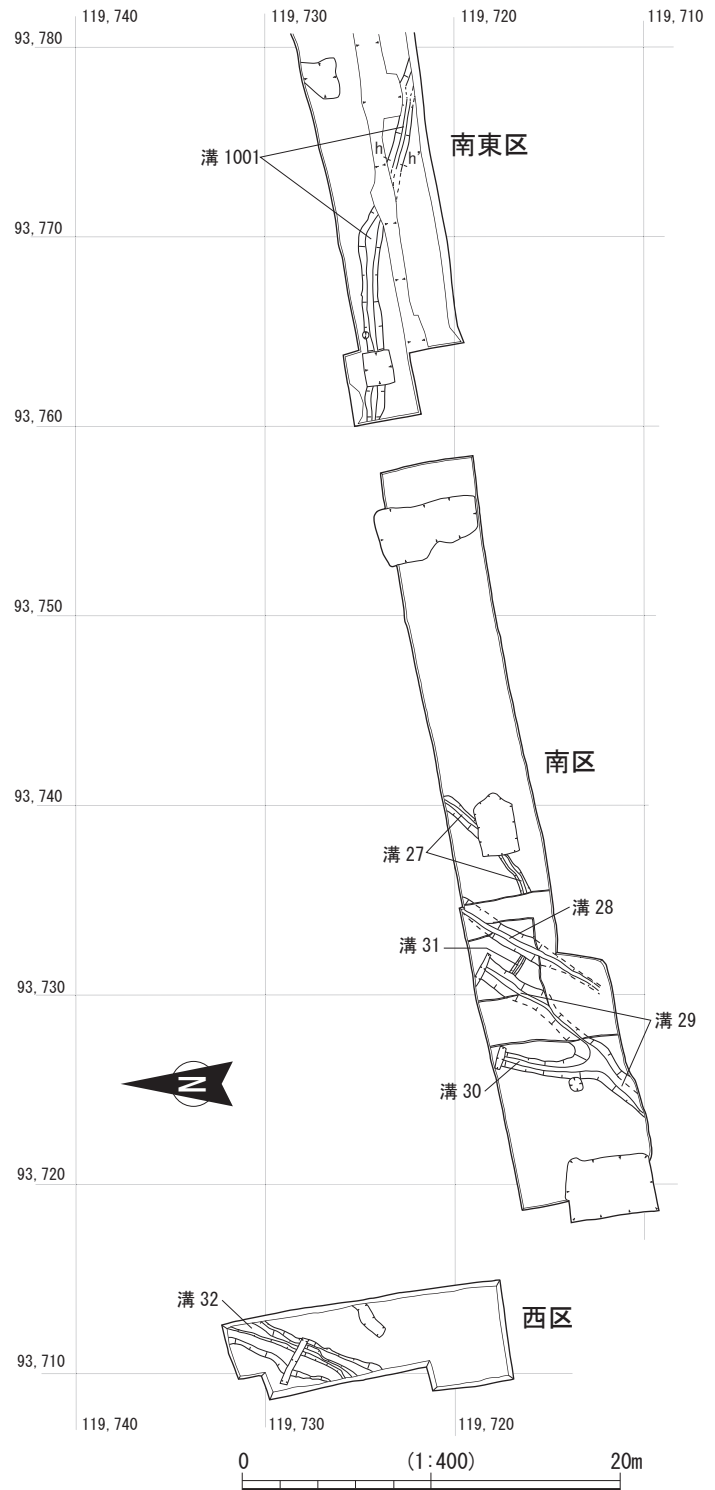
(1) 溝

溝27（第79・80図） 南区の中央付近に位置し、南西－北東方向にのびる。8層上面にて検出され、検出面の標高は2.35mである。規模は残存長6.5m、幅0.4～0.65m、底面の標高2.15mで、検出面からの深さ20cmである。埋土は2層からなり、上層は黄褐色2.5Y5/4のシルト質極細砂、下層は暗灰黄色2.5Y5/2のシルトが堆積する。遺物は出土していない。

溝31（第79・80図） 南区の中央付近に位置し、東西方向にのびる。8層上面にて検出され、検出面の標高は2.25mである。残存長1.1m、最大幅0.3m、底面の標高2.1mで、検出面からの深さ15cmである。埋土は黄褐色2.5Y5/3のシルト質極細砂である。遺物は出土していない。

溝27と溝31は、攪乱や溝28によって切られ連結していないが、両者の位置関係や検出面の標高・幅・底面の標高・埋土の類似性からみて、一連のものであった可能性が高い。

溝28（第79・81図） 南区の西側に位置し、南西－北東方向にのびる。8層上面にて検出され、検出面の標高は2.3mである。幅1.0m、底面の標高は北東端1.7m、南西端1.75mで、検出面からの深さは55～60cmである。底面の標高は、南西から北東に向かってわずかに低くなる。埋土は3層確認され、最上層には黄褐色2.5Y5/3



第79図 第3遺構面全体図

のシルト質極細砂が堆積する。

遺物は弥生土器片が少量出土しており、弥生時代Ⅰ様式と判断できる破片が含まれている。

溝29（第79・81・82図、図版7） 南区の西側に位置し、南西―北東方向にのびる。8層上面で検出され、検出面の標高は北東端で2.35m、南西端で2.3mである。残存長11m、南西端で最大幅1.2m、底面の標高は北東端1.8m、南西端1.9mで、検出面からの深さ40～45cmである。底面の標高は、南西から北東に向かって低くなる。溝29は北東方向（溝29）と北方向（溝30）に分岐する。埋土は3層確認され、最上層には黄褐色2.5Y5/3のシルト質極細砂が堆積する。

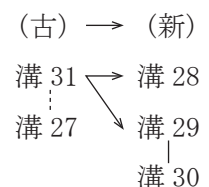
出土遺物は弥生土器片がみられる。1は壺である。頸部に2条、胴部に4条の篋描沈線文が確認され、弥生時代Ⅰ―3・4様式に位置づけられる。

溝30（第79・81・83図、図版7） 南区の東側において溝29から分岐し、南北方向にのびる。8層上面で検出され、検出面の標高は南・北端ともに2.3mである。残存長4.5m、最大幅1.2m、底面の標高は南・北端ともに1.9mで、検出面からの深さ35cmである。埋土は2層確認され、上層には黄褐色2.5Y5/3のシルト質極細砂が堆積する。

出土遺物は弥生土器片が認められる。2は壺胴部で、2条の篋描沈線文が残る。時期は弥生時代Ⅰ―2～3・4様式である。

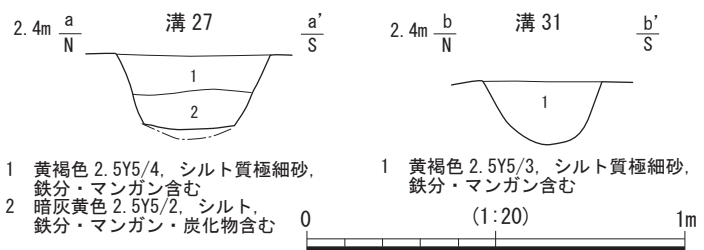
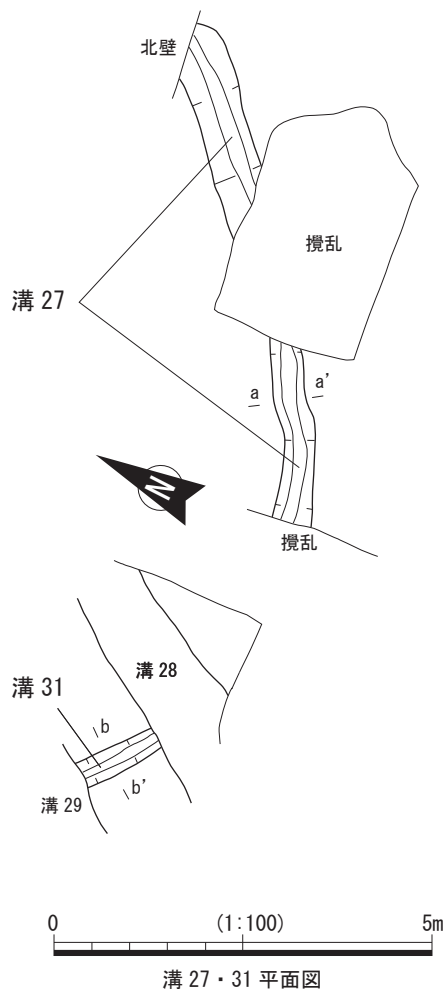
溝32（第78・79・84図） 西区の北部に位置し、南西―北東方向にのびる。8層上面で検出され、検出面の標高は北端で2.2m、南端で2.15mである。残存長8.0m、最大幅2.1m、底面の標高は北端・南端とも2.0mで、検出面からの深さ20cmである。埋土は単層で、鉄分・マンガンを含む暗灰黄色2.5Y5/2の極細砂が堆積する。西区西壁断面（第78図）をみると、南側で溝24、北側では溝25に切られている。弥生土器と考えられる細片が少量出土している。

溝27～32の時期について以下に検討する。これらは8層上面で検出されており、既往の調査成果からみた場合、同層上面に形成された遺構は、弥生時代Ⅰ―1・2様式に位置づけられる。また、溝29埋土からはⅠ―3・4様式の土器、溝30埋土からはⅠ―2～3・4様式の土器が出土している。いずれも小片であり、遺物の出土層位は記録しえなかったが、少なくとも溝の機能時はⅠ―3・4様式以前といえる。さらに、溝27～31の切り合い関係をみると（図80・81）、右上のような新旧関係が復元される。溝31（・溝27）は溝28・29・30よりも古く、Ⅰ―3・4様式以前といえる。



また、他地点からは弥生時代Ⅰ―2様式の水田が検出されており、溝28～30・32はおおよそ並行にのびることから、水田の用水路としての機能が想定される。この点や上述の層位学的所見を勘案すると、溝27～32の時期は弥生時代Ⅰ―2様式の可能性が高いといえる。

溝1001（第76・79・85図、図版7） 南東区の中央付近に位置し、東西方向にのびる。平面的には8層上面で検出されたが、南東区南壁・西壁土層断面では、7層上面から掘り込まれ、4層に覆われていることが確認された（第76図）。検出面の標高は東端2.35m、西端2.3mである。残存長18.5m、最大幅1.2m、底面の標高2.15～2.2mで、検出面からの深さ20cmである。断面は皿状を呈し、

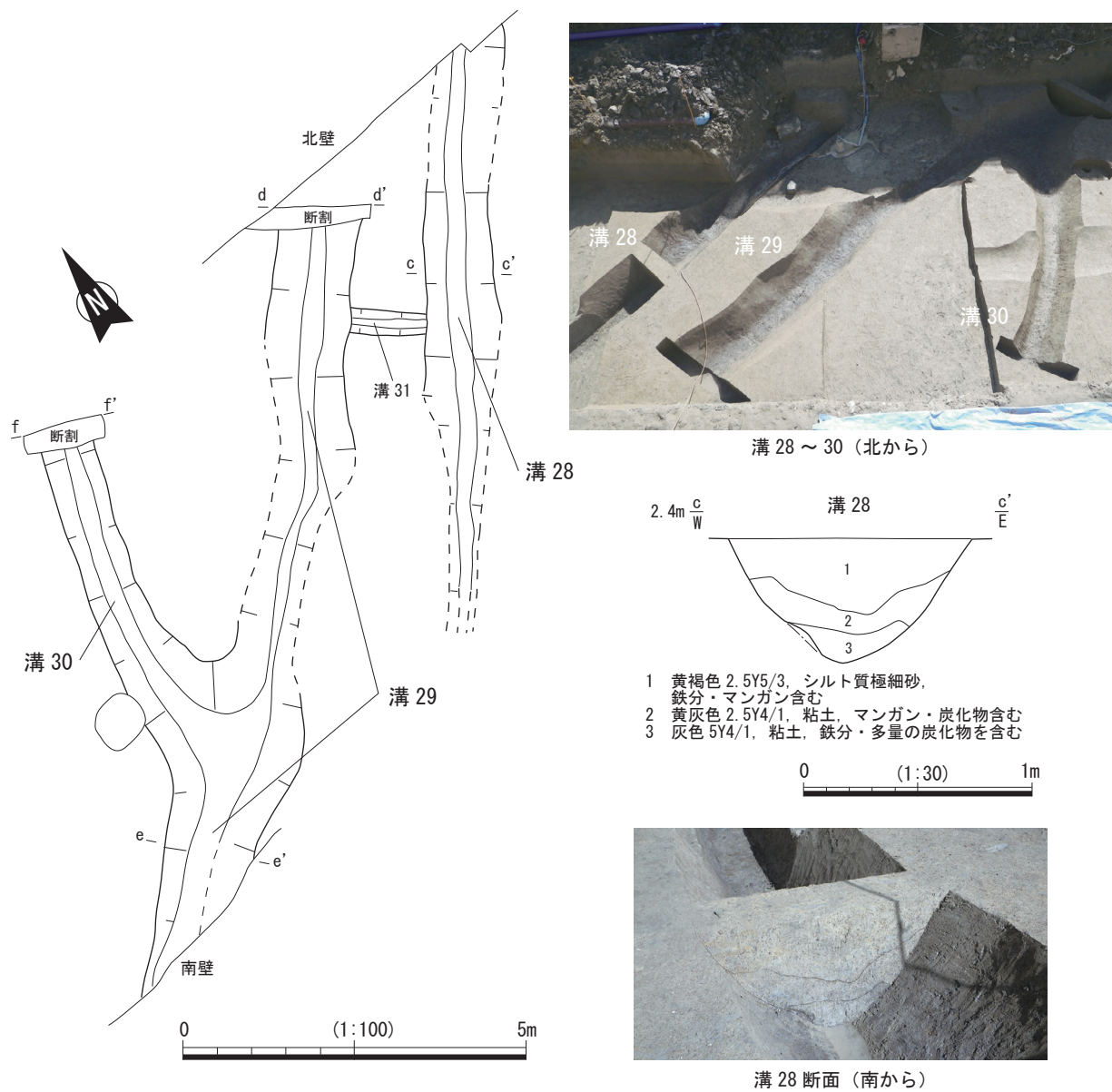


第80図 溝 27・31

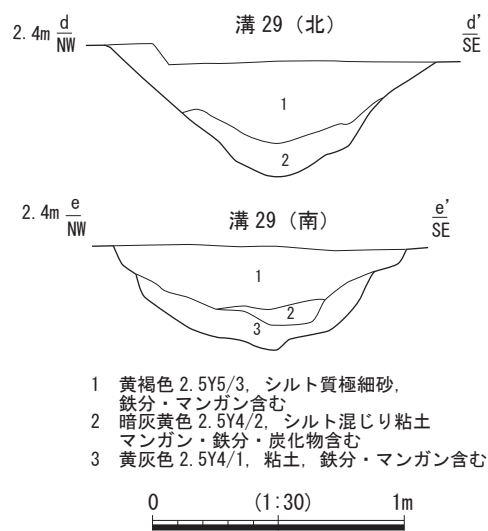
埋土はにぶい黄褐色 2.5Y6/4 のシルト質極細砂に暗灰黄色 2.5Y4/2 のシルトが混入した層が確認される。また、溝 1001 は、溝 1002・1003 に切られている（第 79・86 図）。

出土遺物は弥生土器片が少量出土しており、このうち 3 点を図化している。3 は壺の口縁部で、復元口径 19.4 cm である。4 は壺の胴部で、胴部最大径より上に篋描沈線文が 6 条残る。弥生時代 I - 3・4 様式に位置づけられる。5 は溝の底面から 20cm 程度浮いた埋土 1 層中から出土している（第 85 図）。平底で底部径は 15.8 cm である。外面は刷毛目、内面はナデ・ユビオサエがみられる。外傾接合であることから、弥生時代 I 様式の可能性が高い。

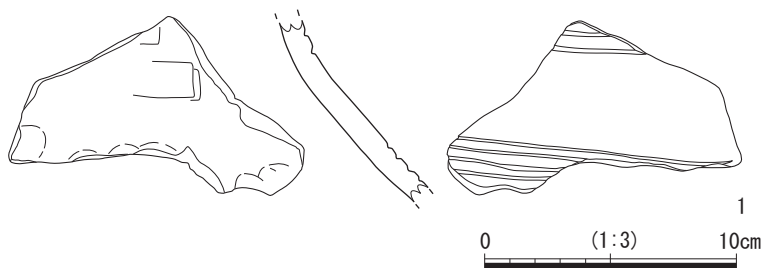
本溝は、7 層上面から検出されているため、弥生時代 I - 3・4 様式～中世の一時期と考えられる。さらに、出土遺物が弥生時代 I - 3・4 様式を中心とする時期に限られるため、当該期に機能していた可能性が高いといえる。



第81図 溝28～30

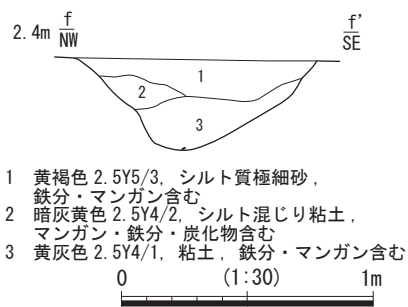


溝 29 (南) 断面 (南西から)

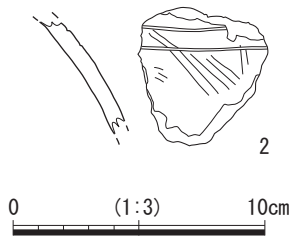


番号	遺構	器種	法量 (cm)			文様・調整 (外／内)	色調 (外／内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
1	溝29	弥生土器・頸胴部一壺	—	—	—	2条・4条篋描沈線文、ナデ／ナデ、ユビオサエ	にぶい黄橙10YR6/4／にぶい黄橙10YR6/4	細、長石	南区

第 82 図 溝 29

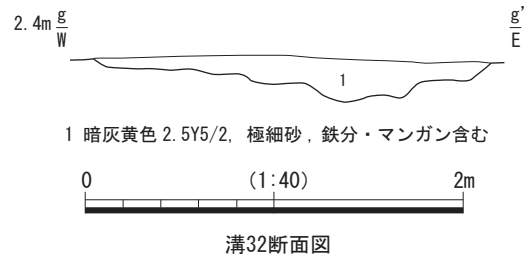
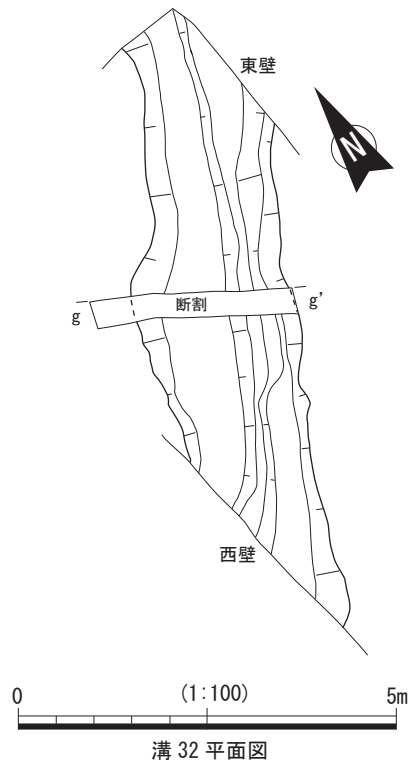


溝30断面 (南から)

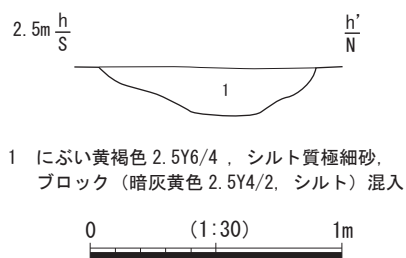


番号	遺構	器種	法量 (cm)			文様・調整 (外／内)	色調 (外／内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
2	溝30	弥生土器・胴部一壺	—	—	—	2条篋描沈線文、刷毛目、ナデ／デナ	にぶい褐7.5YR5/4／にぶい褐5YR5/4	細、長石	南区

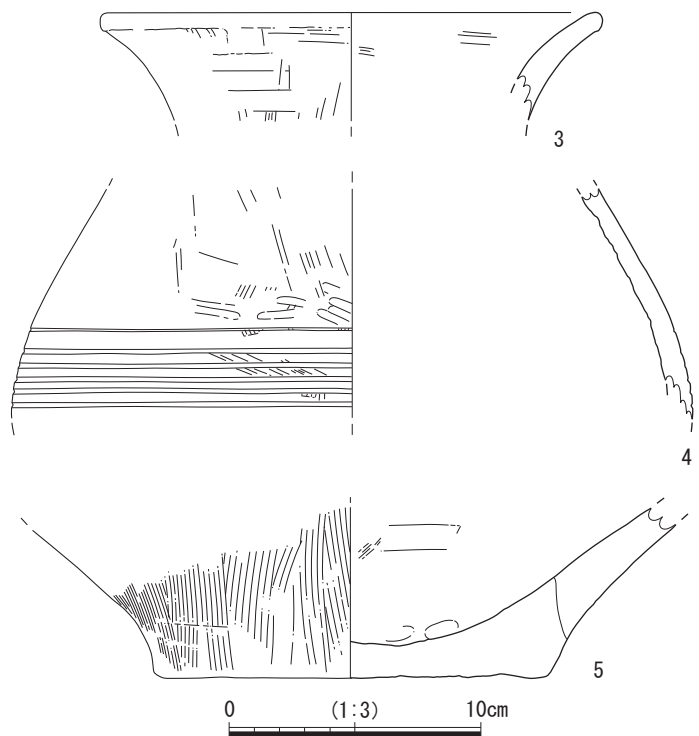
第 83 図 溝 30



第84図 溝32



溝1001断面・遺物(5)出土状況（東から）



番号	遺構	器種	法量(cm)			文様・調整(外／内)	色調(外／内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
3	溝1001	弥生土器・口縁部一壺	19.4	—	—	刷毛目、ナデ／ナデ、刷毛目	にぶい橙7.5YR6/4／ 橙7.5YR6/6	細、長石、角閃石	南東区
4	溝1001	弥生土器・胴部一壺	—	—	—	6条篋描沈線文、刷毛目、ミガキ、ナデ／ナデ、ユビオサエ	にぶい橙7.5YR6/4／ にぶい橙7.5YR7/3	細、石英、長石	南東区
5	溝1001	弥生土器・底部	—	15.8	—	刷毛目／ナデ、ユビオサエ	にぶい黄褐10YR5/3／ 橙7.5YR6/6	小、長石、角閃石	南東区

第85図 溝1001

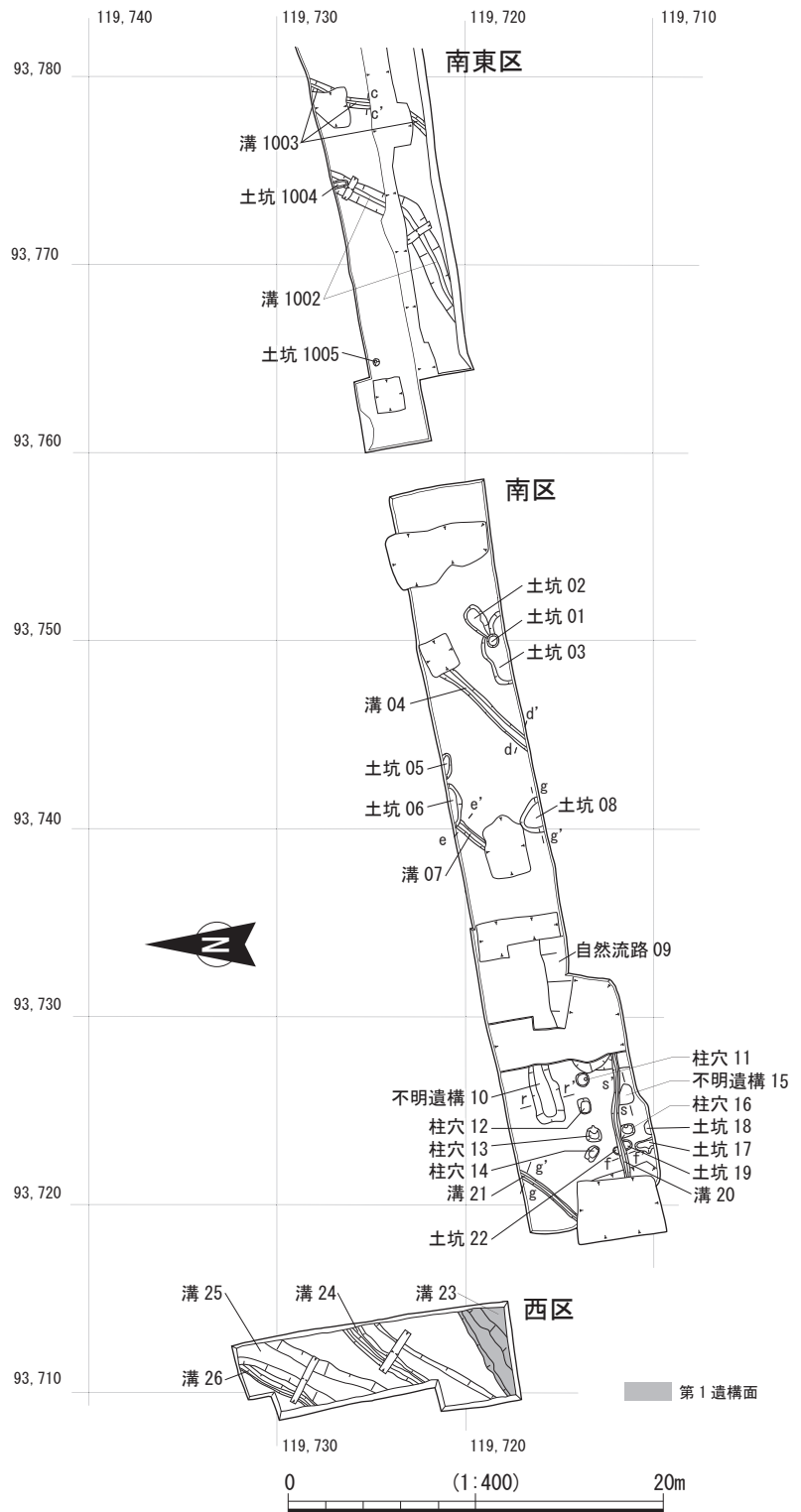
3. 第2遺構面の遺構と遺物

(1) 溝・自然流路

溝1002（第76・86・87図） 南東区の西部に位置している。8層上面で検出され、4層に覆われている。検出面の標高は2.35～2.40mである。7・8層の一部は、4層によって削平を受けており、本来の掘り込み面は8層以上であったと考えられる（第76図）。さらに、7層上面で検出された溝1001を切っているため（第79・86図）、本来の掘り込み面は7層以上であったことがわかる。

残存長9m前後、幅1.0～1.2m、底面の標高は中央付近1.85m、南端1.9mで、検出面からの深さ50cmである。南側断面b-b'（第87図）では、埋土は4層確認され、3層は暗オリーブ褐色2.5Y3/3の粘土、4層は黒褐色2.5Y3/2の粘土である。埋土は洪水起源砂層とは異なる土質である。弥生土器あるいは土師器の細片が少量出土しているが、図化できるものはない。

所属時期は掘り込み面が7層以上である点から、その上限は弥生時代Ⅰ-3・4様式といえる。さらに、次頁右上のような遺構の切り合い関係がみられる。本溝は布留2式期前後の土器片が出土した土坑1004に切



第86図 第1・2遺構面全体図

られている（第 87 図）。土坑 1004 の形成時期をこの時期（古） → （新）とするならば、本溝の下限は布留 2 式期となる。



溝 1003（第 76・86・88 図、図版 7） 南東区の東部に位置

しており、南北方向にのびる。4 層上面にて検出され、

2 層に覆われる（第 76 図）。検出面は標高 2.4～2.6m である。残存長 6.5m、幅 0.5m、底面の標高 2.25～2.35m で、検出面からの深さ 20～40 cm である。埋土は 2 層認められ、1 層は黄灰色 2.5Y5/1 の粗砂に同色シルトが混入している。2 層は黄灰色 2.5Y4/1 の粘土である。また、溝 1003 は溝 1001 を切っている（第 79・86 図）。

出土遺物には弥生土器あるいは土師器片が認められるが、図化できるものはない。そのほかに、鉄鏃 1 点がみられる。長さ 4.8 cm、幅 1.7 cm、厚さ 3.6 mm、重量 5.0g である。柳葉形鏃群 I（杉山 1988）に相当し、弥生時代後期～古墳時代前期にみられる形態である。中央部付近で折れ曲がっている。

本溝の所属時期は検出層位から、中世～近世の一時期と考えられる。

溝 04（第 77・86・89 図） 南区の東部に位置し、南西－北東方向にのびる。5 層上面で検出され、3・4 層に覆われている（第 77 図）。検出面の標高は 2.4～2.45m である。残存長 5.5m、幅 0.5～0.6m、底面の標高は 2.35m で、検出面からの深さ 10～40 cm である。埋土は単層で褐灰色 10YR4/1 のシルトが堆積する。

弥生土器あるいは土師器の細片が出土しているが、図化できるものはない。本溝は検出層位から、弥生時代 I－3・4 様式～近世の一時期といえる。

溝 07（第 86・89 図） 南区の中央部に位置する。検出面の標高は 2.4m で、4～7 層に相当する。残存長 1.8m、幅 0.4m、底面の標高 2.3m で、検出面からの深さ 10 cm である。埋土は単層で、暗灰黄色 5Y5/2 のシルトが堆積する。溝 04 と類似する埋土である。弥生土器あるいは土師器の細片が出土しているが、図化できるものはない。

本溝は土坑 06 によって切られる（第 86 図）。

溝 20（第 86・90 図、図版 7） 南区の西部に位置し、東西方向にのびる。検出面は標高 2.45m で、4～7 層に相当する。残存長 6.6m、幅 0.4～0.5m、底面の標高 2.3m で、検出面からの深さ 15 cm である。埋土は 3 層確認され、最下層の 3 層に土器片が含まれている。

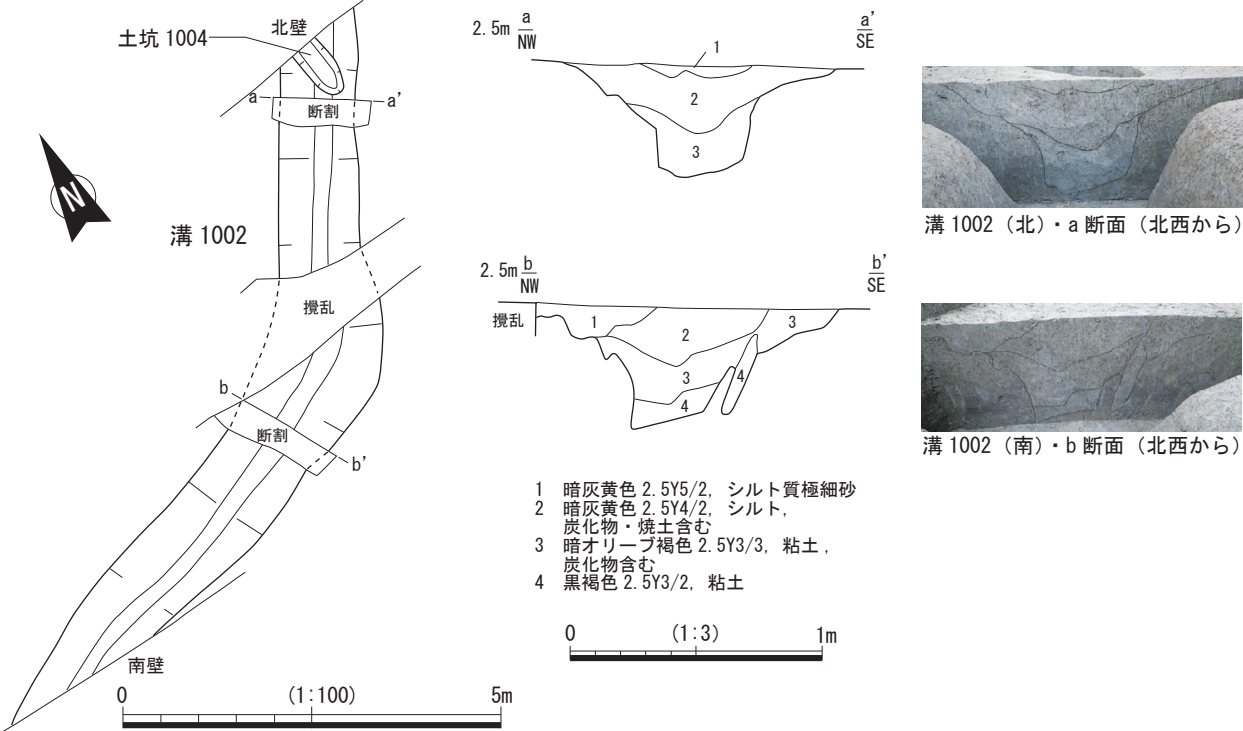
出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器片が出土している。須恵器（7）を図化しているが、時期は不明である。

本溝は、不明遺構 15、柱穴 16、土坑 19・22 を切っており（第 86 図）、後述するように土坑 19、柱穴 16 は古代に位置づけられることから、所属時期は古代～近世といえる。

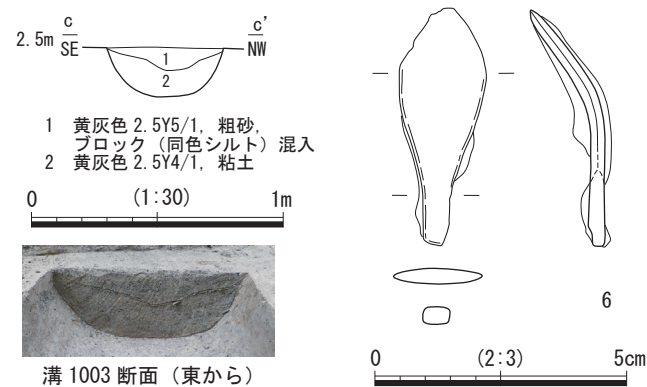
溝 21（第 86・91 図） 南区の西部に位置し、南西－北東方向にのびる。検出面の標高は 2.4m で、4～7 層に相当する。残存長 3.8m、幅 0.4m、底面の標高 2.3m で、検出面からの深さ 10 cm である。

埋土は単層で、暗灰黄色 2.5Y4/2 粘土である。本溝の埋土は溝 04・07 と類似する。遺物は出土していない。

溝 24（第 78・86・92 図） 西区の中央部に位置し、南西－北東方向にのびる。5 層上面で検出され、3 層に覆われている（第 78 図）。検出面の標高は 2.4～2.5m である。残存長 7.5m、幅 1.6m、底

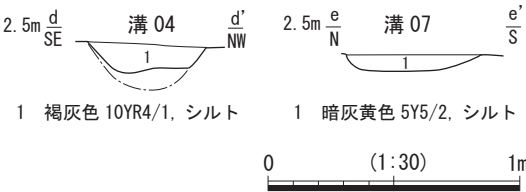


第 87 図 溝 1002

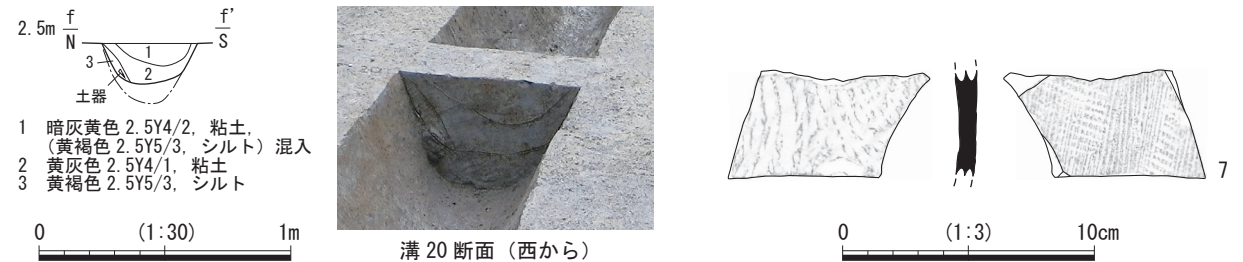


番号	遺構	器種	法量 (cm)			重量 (g)
			長	幅	厚	
6	溝 1003	鉄鏝	4.8	1.7	0.36	5.0

第 88 図 溝 1003



第 89 図 溝 04・07

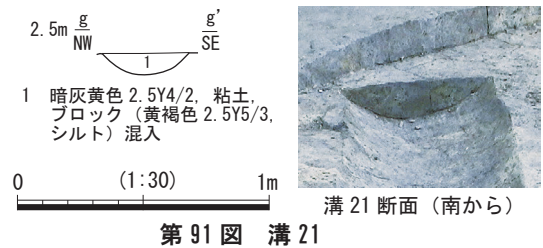


番号	遺構	器種	法量 (cm)			文様・調整 (外／内)	色調 (外／内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
7	溝 20	須恵器	—	—	—	タタキ、刷毛目／当て具痕	灰白 2.5Y7/1／灰白 5Y7/1	微細	南区

第 90 図 溝 20

面の標高 2.15 ～ 2.25m、検出面からの深さ 20 ～ 25 cmである。埋土は暗灰黄色 2.5Y5/2 のシルトである。遺物は認められない。

本溝の所属時期は、検出層位から弥生時代 I - 3・4 様式～近世の一時期といえる。



第 91 図 溝 21

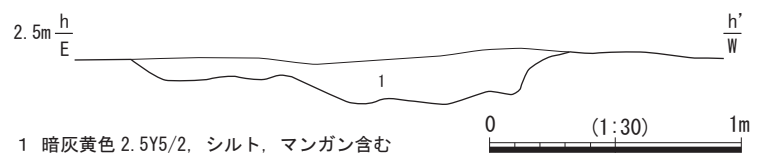
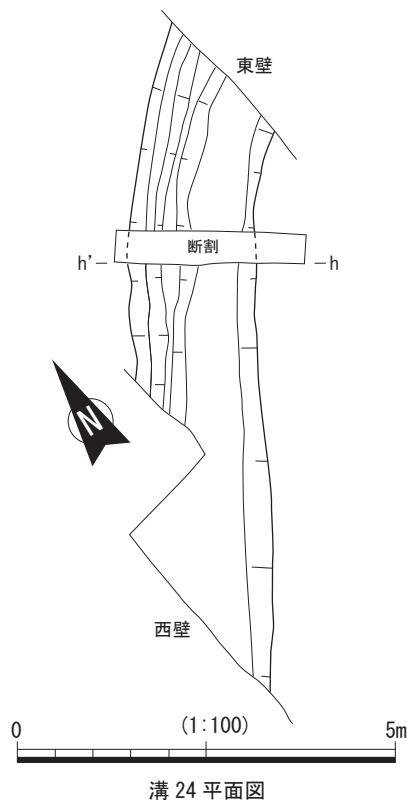
溝 25 (第 78・86・93 図、図版 7) 西区に位置し、

南西－北東方向にのびる。5 層上面で検出され、3 層に覆われている (第 78 図)。検出面の標高は 2.4 ～ 2.5m である。残存長 7.0m、幅 2.2m、底面の標高 2.1 ～ 2.2m、検出面からの深さ 20 ～ 45cm である。埋土は暗灰黄色 2.5Y4/2 のシルトである。溝 25 は溝 26 を切っている (第 78・93 図)。

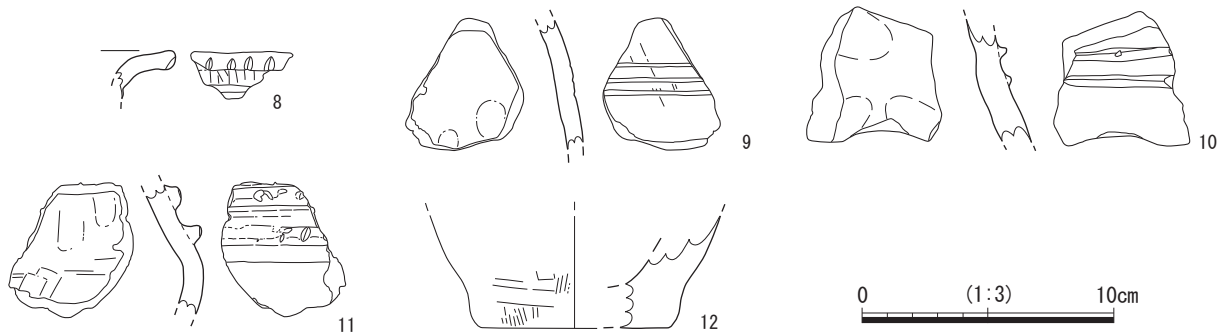
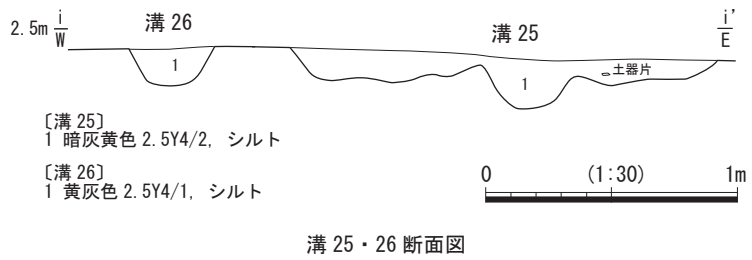
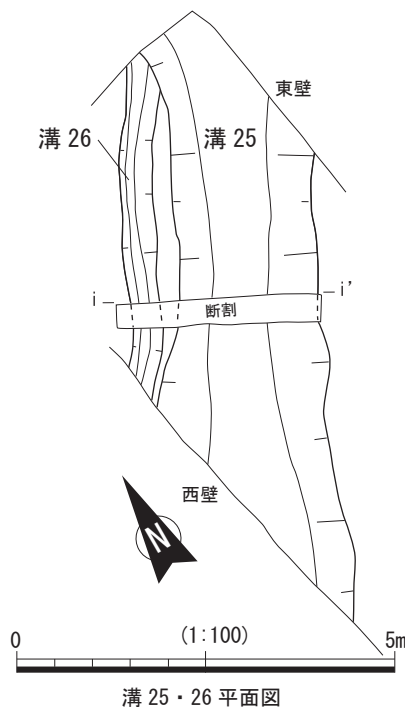
出土遺物は弥生土器片が認められ、そのうちの 5 点を実測している。8 は甕の口縁部である。口唇部下端に刻目、口縁部直下に篋描沈線文が 1 条残る。9 ～ 11 は壺胴部と考えられる。9 は篋描沈線文 3 条、10 は無刻目の貼付突帯文、11 は刻目を有する貼付突帯文が施される。12 は底部である。8 ～ 11 は弥生時代 I - 3・4 様式を中心とする時期と考えられる。

本溝の所属時期は、検出層位から弥生時代 I - 3・4 様式～近世の一時期といえる。また、出土遺物が小片であるため判断は難しいが、弥生時代 I - 3・4 様式に絞り込める可能性もある。

溝 26 (第 78・86・93 図) 西区に位置し、南西－北東方向にのびる。5 層上面で検出され、3 層に覆われている。検出面の標高は 2.4 ～ 2.55m、長さ 4.5m、幅 0.5m、底面の標高 2.25 ～ 2.35m、検



第 92 図 溝 24

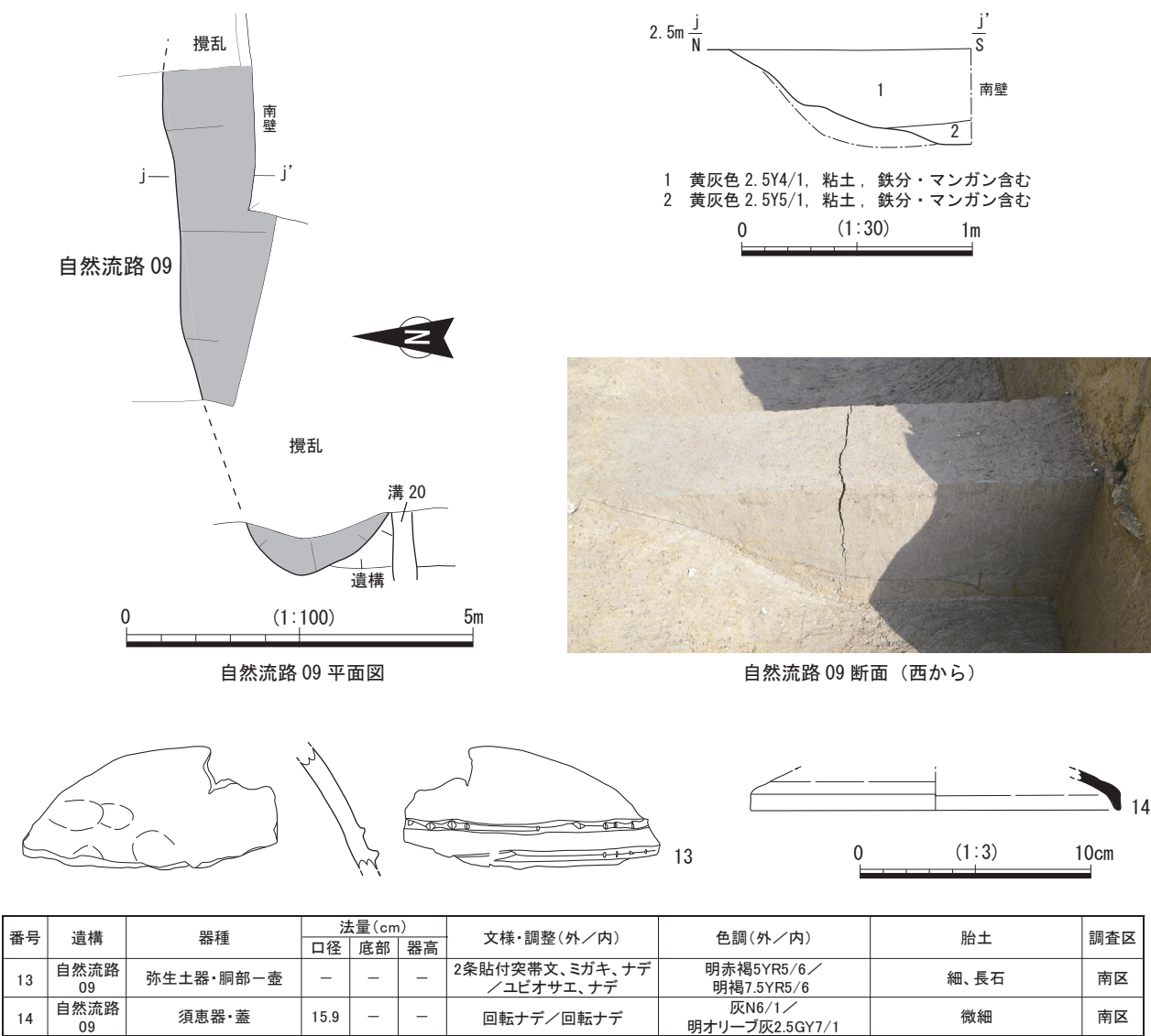


番号	遺構	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
8	溝25	弥生土器・口縁部一壺	—	—	—	1条篋描沈線文、刷毛目、ナデ／ナデ	にぶい黄橙5YR6/4／ にぶい黄橙5YR6/4	細、角閃石	西区
9	溝25	弥生土器・胴部一壺	—	—	—	3条篋描沈線文、刷毛目、ナデ／ナデ、ユビオサエ	橙2.5YR6/8／橙5YR6/8	細、石英、長石	西区
10	溝25	弥生土器・胴部一壺	—	—	—	2条無刻目貼付突帯文／ナデ、ユビオサエ	橙5Y6/8／橙5Y6/8	小、長石	西区
11	溝25	弥生土器・胴部一壺	—	—	—	2条貼付突帯文、ナデ／刷毛目、ナデ	にぶい黄橙10YR6/4／ にぶい黄橙5YR6/4	細、石英、長石、角閃石	西区
12	溝25	弥生土器・底部	—	7.4	—	刷毛目、ナデ／ナデ	橙7.5YR6/6／ 橙5YR6/6	小、長石、角閃石	西区

第93図 溝25・26

出面からの深さ15～25cmである。埋土は黄灰色2.5Y4/1のシルトである。遺物は出土していない。溝25に切られている（第78・93図）。

本溝の所属時期は、検出層位から弥生時代Ⅰ－3・4様式～近世といえる。仮に、溝25の時期が弥生時代Ⅰ－3・4様式であれば、本溝も同時期の可能性がある。



第 94 図 自然流路 09

自然流路 09（第 77・86・94 図、図版 7） 南区の中央部に位置する。流路西端を検出しており、東西方向にのびる。6 層上面で検出され、3 層に覆われている（第 77 図）。検出面の標高は 2.4 ～ 2.45m である。残存長 7.3m、底面の標高 2.0 ～ 2.1m で、検出面からの深さ 40cm である。埋土は 2 層確認され、ともに黄灰色 2.5Y4/1・2.5Y5/1 の粘土である。

出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器片がみられる。13 は弥生土器の壺胴部である。刻目をもつ貼付突帯文が 2 条確認できる。弥生時代 I － 3・4 様式である。14 は須恵器の杯蓋であり、8 世紀代に相当する。

本自然流路の所属時期は検出層位と出土遺物から弥生時代 I － 3・4 様式～近世の一時期といえる。

(2) 土坑・不明遺構

土坑 1004（第 86・95 図、図版 7） 南東区に位置する。全体は未検出であり、さらに北にのびるため、溝の可能性もある。検出面の標高は 2.35m で、4～7 層に相当する。残存長 0.8m、幅 0.4m、底面の標高は 2.25m で、検出面からの深さ 10cm である。断面は U 字形を呈し、埋土は単層で黄灰色 2.5Y4/1 の粘土である。溝 1002 を切っている（第 86 図）。

出土遺物は、小型丸底壺の破片で、布留 2 式期前後である。

本土坑の所属時期は、検出層位からみると弥生時代 I－3・4 様式～近世の一時期といえる。さらに、埋土から布留 2 式期前後に位置づけられる土器片が出土しており、これが土坑の時期を示す可能性もある。

土坑 01（第 86・96・97 図、図版 7） 南区の東部に位置する。検出面の標高は 2.45m で、4～7 層に相当する。直径 0.7m の円形である。底面の標高 2.35m で、検出面からの深さ 10 cm である。埋土は褐灰色 10YR4/1 のシルトである。

出土遺物は、土器 1 点が認められた。16 は杯部から脚部片で、高杯もしくは器台と考えられる。非常に薄い作りであり、最も薄い杯底部では 2mm 程度である。精製の胎土が用いられている。脚部に透し孔が 1 か所確認できる。時期は弥生時代 VI 様式～布留 1 式期であろうか。

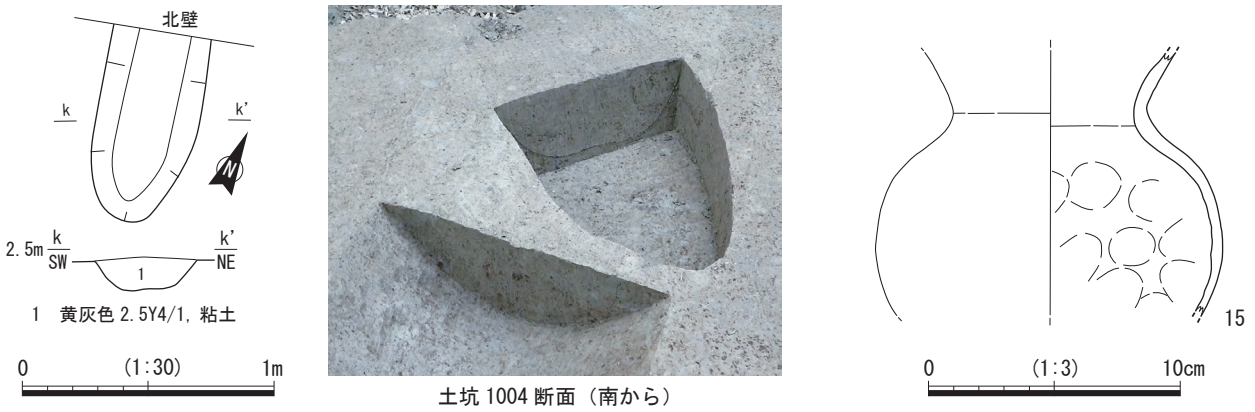
本土坑の所属時期は、検出層位からみると弥生時代 I－3・4 様式～近世の一時期といえる。出土土器は破片ではあるものの、これが土坑の時期を示すとすれば、弥生時代 VI 様式～布留 1 式期に位置づけられる。

土坑 02（第 86・97 図） 南区の東部に位置する。検出面は標高 2.4m で、4～7 層に相当する。長軸 2.0m、短軸 1.0m、底面の標高 2.3m で、検出面からの深さ 10 cm である。埋土は灰黄褐色 10YR4/2 のシルトが堆積する。出土遺物はみられない。

土坑 03（第 77・86・97 図） 南区の東部に位置する。検出面の標高は 2.4～2.45m である。第 77 図をみると、本土坑は 7 層上層で検出され 4 層で覆われる。ただし、5～7 層が 4 層によって削平されている可能性があるため、本来の掘り込み面は 5～7 層とみられる。長軸 3.8m、短軸 1.2m、底面の標高 2.25～2.35m で、深さ 5～15cm である。埋土は暗灰褐色 2.5Y4/2 のシルトが堆積する。出土遺物はみられない。

土坑 01～03 の所属時期について以下に検討する。いずれも検出層位からみると弥生時代 I－3・4 様式～近世の一時期と考えられる。遺構の切り合い関係をみると古い順位に、土坑 03→土坑 02→土坑 01 となる（第 97 図）。上記のように、土坑 01 の時期が弥生時代 VI 様式～布留 1 式期であれば、土坑 02・03 の時期は、弥生時代 I－3・4 様式～布留 1 式期の一時期といえる。

土坑 05（第 86・98 図） 南区の中央部に位置する。検出面は標高 2.4m で、4～7 層に相当する。長軸 1.4m、短軸 0.4m、底面の標高 2.3m で、検出面からの深さ 10cm である。埋土には褐灰色 10YR4/1 のシルトが堆積する。土坑 01～03 の埋土と類似する。土器細片が出土しているが、時期を判断できるものはない。



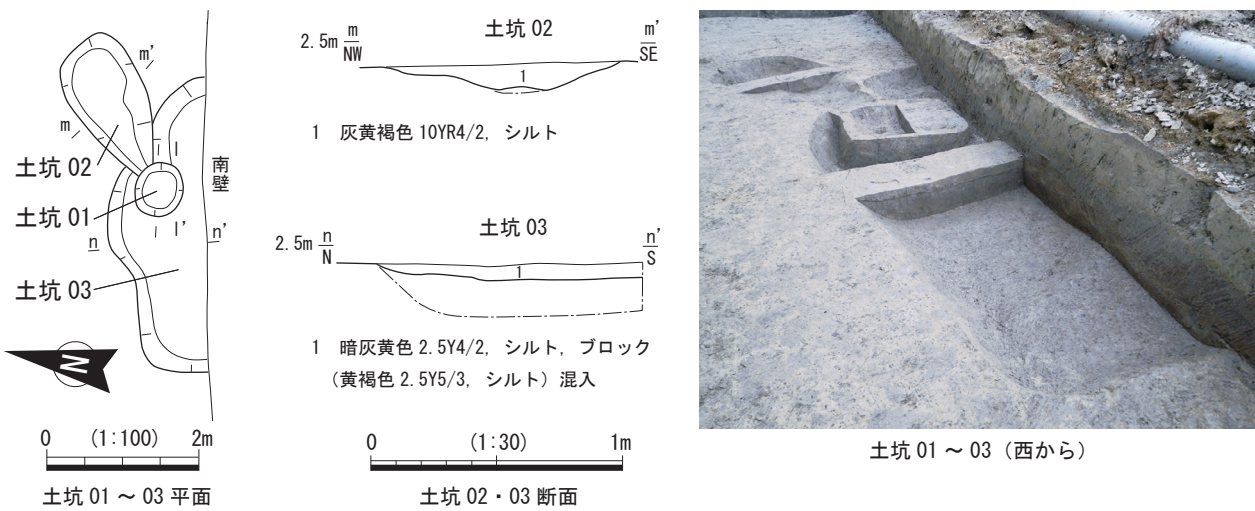
番号	遺構	器種	法量 (cm)			文様・調整 (外／内)	色調 (外／内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
15	土坑 1004	土師器・口縁部一胴部	—	—	—	ナデ／ナデ、ユビオサエ	橙 7.5YR6/6／ にぶい黄橙 10YR6/4	微細、長石	南東区

第 95 図 土坑 1004

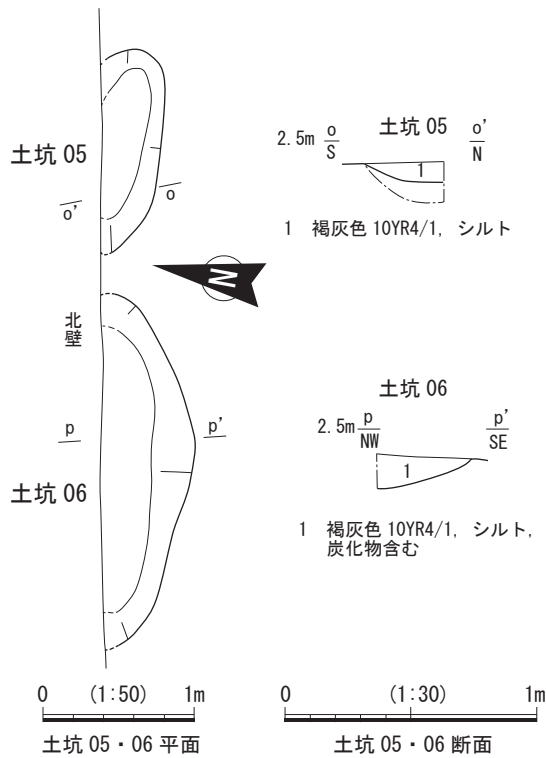


番号	遺構	器種	法量 (cm)			文様・調整 (外／内)	色調 (外／内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
16	土坑 01	弥生土器／土師器 ・高杯／器台	—	—	—	ハケメ、ナデ／ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4／ 橙 5YR6/6	微細	南区

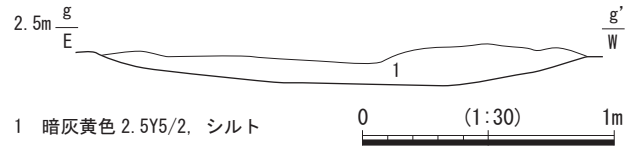
第 96 図 土坑 01



第 97 図 土坑 02・03

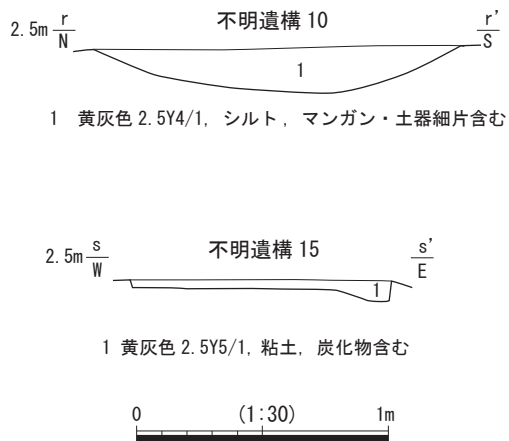


第 98 図 土坑 05・06

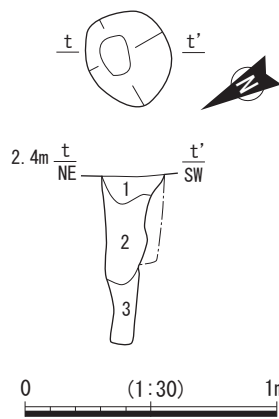


土坑 08 断面（北から）

第 99 図 土坑 08



第 100 図 不明遺構 10・15



土坑 1005 断面（西から）

- 1 暗灰黄色 2.5Y4/2, 粘質シルト質極細砂, 炭化物・焼土含む
- 2 オリーブ黒色 5Y3/2, 粘土, 炭化物・焼土含む
- 3 オリーブ褐色 5Y3/1, 粘土

第 101 図 土坑 1005

土坑 06(第 86・98 図) 南区の中央部に位置する。検出面は標高 2.35～2.4m で、4～7 層に相当する。長軸 2.3m、短軸 0.6m、底面からの標高 2.25m で、検出面からの深さ 10～15 cm である。埋土は褐灰色 10YR4/1 のシルトである。土坑 01～03 の埋土と類似する。弥生土器あるいは土師器の細片が出土しているが、図化できるものはない。

土坑 08 (第 77・86・99 図) 南区の中央部に位置する。7 層上面で検出され、5・6 層に覆われている (第 77 図)。検出面の標高 2.4～2.55m である。長軸 1.9m、短軸 1.1m、底面の標高 2.05～2.1m で、検出面からの深さ 50 cm 以上である。埋土は暗灰黄色 2.5Y5/2 のシルトである。弥生土器あるいは土師器・須恵器の細片が出土しているが、図化できるものはない。

本土坑の所属時期は、検出層位から弥生時代 I－3・4 様式～中世の一時期と判断される。

不明遺構 10 (第 86・100 図) 南区の西部に位置する。検出面の標高は 2.45m で、4～7 層に相当する。長軸 3.1m、短軸 1.5m、底面の標高 2.25m で、検出面からの深さ 20 cm である。埋土は黄灰色 2.5Y5/1 のシルトが堆積する。弥生土器あるいは土師器片が出土しているが、図化できるものはない。

不明遺構 15 (第 86・100 図) 南区の西部に位置する。検出面の標高は 2.4m で、4～7 層に相当する。長軸 1.1m、短軸 0.8m、底面の標高 2.3m で、検出面からの深さ 10 cm である。埋土は黄灰色 2.5Y5/1 の粘土である。溝 20 に切られている。弥生土器あるいは土師器片が出土しているが、図化できるものはない。

土坑 1005 (第 86・101 図) 南東区の西部に位置する。検出面の標高は 2.35m で、4～7 層に相当する。平面形は円形を呈しており、直径 0.3m である。底面の標高 1.7m で、深さ 65 cm である。断面は先細りの長形状を呈する。埋土は 3 層に分かれ、杭痕の可能性が考えられる。弥生土器あるいは土師器の細片が出土しているが、時期は特定できない。

(3) 掘立柱建物

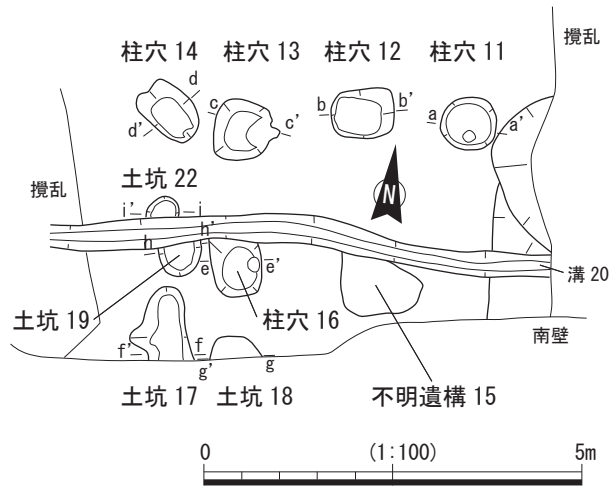
南区の西部にて、等間隔に配された柱穴 11～14・16 を検出した。これらは掘立柱建物の可能性がある。あわせて、これと関連する可能性がある土坑 17～19・22 についても説明する。すべて検出面は標高 2.4m 前後であり、4～7 層に相当する。

柱穴 11 (第 86・102 図) 柱穴群のなかで最も東に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 2.1m で、検出面からの深さは 35 cm である。掘方は直径 0.7m の円形で、直径 10 cm の柱痕を確認できる。埋土は 3 層あり、いずれも粘土層である。1 層は暗灰黄色 2.5Y4/2、2 層は黄灰色 2.5Y4/1 である。古代の土師器・須恵器の細片が出土しているが、詳細な時期を特定できるものはない。

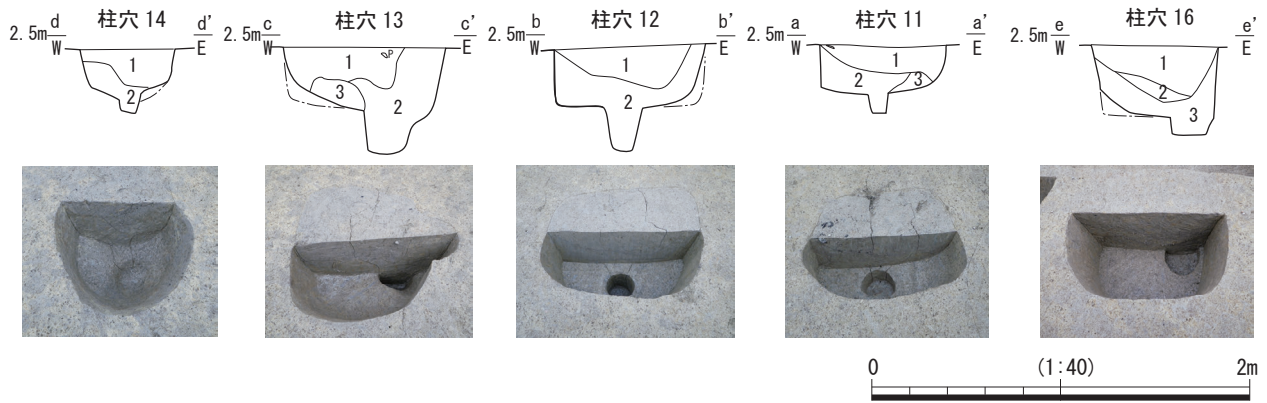
柱穴 12 (第 86・102 図) 柱穴 11 の西側に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 1.9m で、検出面からの深さは 55 cm である。掘方は長軸 0.8m、短軸 0.65m で、直径 20 cm の柱痕を確認できる。埋土は 2 層確認でき、上層は黄灰色 2.5Y4/1 の粘土、下層は褐灰色 10YR4/1 の粘土である。土師器・須恵器の細片が出土している。

柱穴 13 (第 86・102 図、図版 8) 柱穴 12 の西側に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 1.9m で、検出面からの深さ 55 cm である。掘方は長軸 0.9m、短軸 0.8m で、直径 20 cm の柱痕を確認できる。埋土は 3 層確認でき、いずれも黄灰色 2.5Y4/1・2.5Y5/1 の粘土である。

出土遺物は土師器の細片と須恵器である。17・18 は須恵器の杯蓋である。17 は全体の約 3 分の 1 が残存しており、柱穴 13 と土坑 19 から出土した破片が接合した。天井は比較的高く、つまみの中央は盛り上がる。口縁端部は屈曲し下方にのびる。平城宮Ⅱ～Ⅲ (西 1986) に相当する (早淵 1999)。類例は庄遺跡・加茂名中学校地点で検出された掘建柱建物 SB02 の柱穴 SP06 と土壌 SK05 の



掘立柱建物（南から）



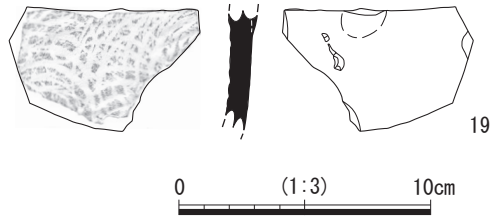
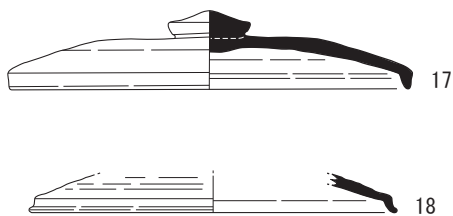
〔柱穴 11〕
1 暗灰黄色 2.5Y4/2, 粘土, 焼土・炭化物含む
2 黄灰色 2.5Y4/1, 粘土
3 2層にブロック(黄褐色 2.5Y5/3, シルト)混入

〔柱穴 13〕
1 黄灰色 2.5Y4/1, 粘土, マンガン・炭化物含む
2 1層にブロック(シルト)混入
3 黄灰色 2.5Y5/1, 粘土, 鉄分・マンガン含む

〔柱穴 16〕
1 暗灰黄色 2.5Y4/2, 粘土, 炭化物含む
2 1層にブロック(黄褐色 2.5Y5/3, シルト)混入
3 黄灰色 2.5Y4/1, 粘土

〔柱穴 12〕
1 黄灰色 2.5Y4/1, 粘土, マンガン・炭化物含む
2 褐灰色 10YR4/1, 粘土, マンガン含む

〔柱穴 14〕
1 黄灰色 2.5Y4/1, 粘土, 炭化物含む
2 1層にブロック(褐灰色 10YR4/1, 粘土)混入



番号	遺構	器種	法量(cm)			文様・調整(外／内)	色調(外／内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
17	柱穴13・土坑19	須恵器・杯蓋	15.9	—	3.1	回転ナデ／回転ナデ	灰白N7/1／灰白N7/1	微細	南区
18	柱穴13	須恵器・杯蓋	14.5	—	—	回転ナデ／回転ナデ	灰白2.5Y7/1／灰白2.5Y7/1	微細	南区
19	柱穴13	須恵器・胴部一壺？	—	—	—	タタキ、自然釉／当て具痕	灰オリブ7.5YR5/2／灰白N8/0	微細	南区

第102図 柱穴 11～14・16（掘立柱建物）

出土須恵器があげられる（勝浦 1996）。18 の杯蓋の口縁端部は屈曲し、わずかに外方に開く。平城宮Ⅳに位置づけられる。類例は庄遺跡・加茂名中学校地点掘立柱建物 SB01 の柱穴 SP05 出土須恵器をあげることができる（勝浦 1996）。19 は須恵器甕の胴部であろうか。

柱穴 13 の所属時期は、埋土から平城宮Ⅱ～Ⅳの須恵器が出土する点から、8 世紀代とみられる。

柱穴 14（第 86・102 図） 検出面の標高 2.45m、底面の標高 2.1m で、検出面からの深さ 35 cm である。掘方は長軸 0.8m、短軸 0.55m で、直径 10 cm の柱痕を確認できる。埋土は 2 層確認でき、上層は黄灰色 2.5Y4/1 の粘土、下層は上層に褐灰色 10YR4/1 の粘土のブロックが混入している。土師器・須恵器細片が出土しているが、時期を特定できるものはない。

柱穴 16（第 86・102 図） 柱穴 13 の南に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 2.0m で、検出面からの深さ 45 cm である。掘方は長軸 0.75m、短軸 0.65m で、直径 20 cm の柱痕を確認できる。溝 20 によって切られている。

出土遺物は古代の土師器・須恵器片が少量出土しているが、詳細な時期は判断できない。

土坑 17（第 86・102・103 図） 土坑 19 の南に位置する。検出面の標高 2.4m、底面の標高 2.1m で、検出面からの深さ 30 cm である。残存部で長軸 1.0m、短軸 0.75m である。土師器・須恵器の細片が出土しているが、図化できるものはない。

土坑 18（第 86・102・104 図） 土坑 17 の東に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 2.2m で、検出面からの深さ 25 cm である。残存部の幅 0.7m である。埋土は暗黄灰色 2.5Y4/2 と黄灰色 2.5Y4/1 の粘土を 3 層確認できる。古代の土師器細片が出土している。

土坑 19（第 86・102・105 図、図版 8） 柱穴 16 の西 1.0m に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 2.25m で、検出面からの深さ 20 cm である。残存部の幅 0.55m である。溝 20 によって切られている。

出土遺物には土師器・須恵器が認められる。先述のように、本土坑と柱穴 13 から出土した須恵器杯蓋（17）は同一個体である。20 は暗文土器の皿である。色調は橙色である。内面には幅 1 mm 未満の放射状暗文が施される。暗文の施文方法などから、畿内産土師器を在地で模倣したものと考えられる。時期は平城宮Ⅱ～Ⅲに位置づけられる（早瀬 1999）。

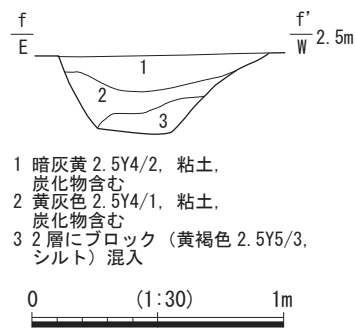
本土坑の所属時期は、出土遺物から平城宮Ⅱ～Ⅳとみられる。

土坑 22（第 86・102・106 図） 柱穴 14 の南 1.4m に位置する。検出面の標高 2.45m、底面の標高 2.3m で、検出面からの深さ 15 cm である。残存部の幅 0.4m である。溝 20 によって切られている。埋土は暗灰黄色 2.5Y4/2 の粘土である。遺物はみられない。

掘立柱建物の可能性が高い柱穴 11～14・16 は、現状で長軸 3 間×短軸 1 間が認められる。建物の方角は長軸から N97° W である。柱穴間の距離は長軸で西から 1.0m、1.7m、1.7m、短軸は 1.7m である。長軸西端では柱穴の間隔が狭い場所がみられるため、庇付建物の可能性や、複数の掘立柱建物が重複している可能性も考えられるが、この範囲だけで判断することは難しい。

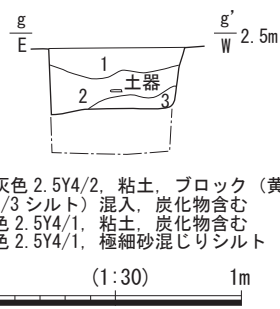
柱穴周辺の土坑 17～19・22 は、柱痕は検出されていないが、埋土は柱穴群と類似しており、掘立柱建物に伴う柱穴あるいは関連遺構の可能性がある。

柱穴から出土した須恵器は平城宮Ⅱ～Ⅳの時期幅におさまり、実年代は紀年木簡の検討から 730 年



土坑 17 断面（北から）

第 103 図 土坑 17

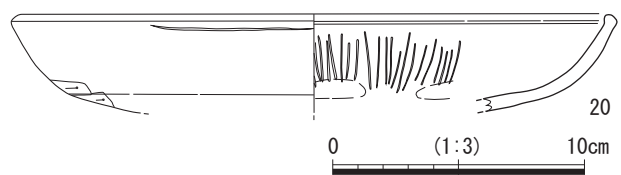


土坑 18 断面（北から）

第 104 図 土坑 18



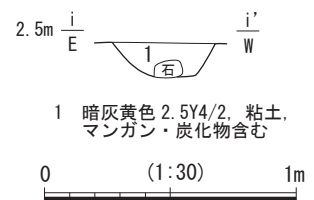
土坑 19 断面（南から）



番号	遺構	器種	法量 (cm)			文様・調整 (外／内)	色調 (外／内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
20	土坑 19	土師器・杯	23.4	—	—	ナデ／暗文、ユビオサエ	橙5YR6/6／橙5YR7/6	微細	南区

第 105 図 土坑 19

から 765 年頃とされる（西 1986）。加えて、出土遺物がない柱穴も埋土が類似しており、同時期の可能性が高いと考えられる。よって、本掘立柱建物の所属時期は 8 世紀代といえる。



第 106 図 土坑 22

(4) 包含層

7層出土遺物 (第107図、図版8) 21～29は弥生土器である。21は胴部であろうか。刻目を有する貼付突帯文をもつ。内面調整はナデである。弥生時代Ⅰ－3・4様式に相当する。22は壺の胴部である。刻目を有する貼付突帯文が胴部最大径に1条めぐり、調整は外面が刷毛目、内面がユビオサエである。弥生時代Ⅰ－3・4様式に相当する。23は壺の口縁部である。弥生時代Ⅰ－3・4様式であろうか。24は壺の胴部上半である。頸胴部境界付近に篋描沈線文が8条施される。内面調整はナデである。篋描沈線文が多条化していることから弥生時代Ⅰ－3・4様式に相当する。25は蓋である。内面調整はナデである。弥生時代Ⅰ様式であろうか。26は胴部で、最大径は24.2 cmである。胴部上半に上から三角形刺突文2段、篋描沈線文10条前後、三角形刺突文1段が施される。弥生時代Ⅰ－3・4様式と判断される。27は壺の胴部上半である。調整は内外面ともに刷毛目とナデである。弥生時代Ⅰ様式であろうか。28・29は底部である。28の底部復元径は8.0 cmである。内面調整はナデ、ユビオサエである。29の底部復元径は8.0 cmである。調整は外面が刷毛目とナデで、内面はナデである。

7層の出土土器は、弥生時代Ⅰ－3・4様式が中心となる。

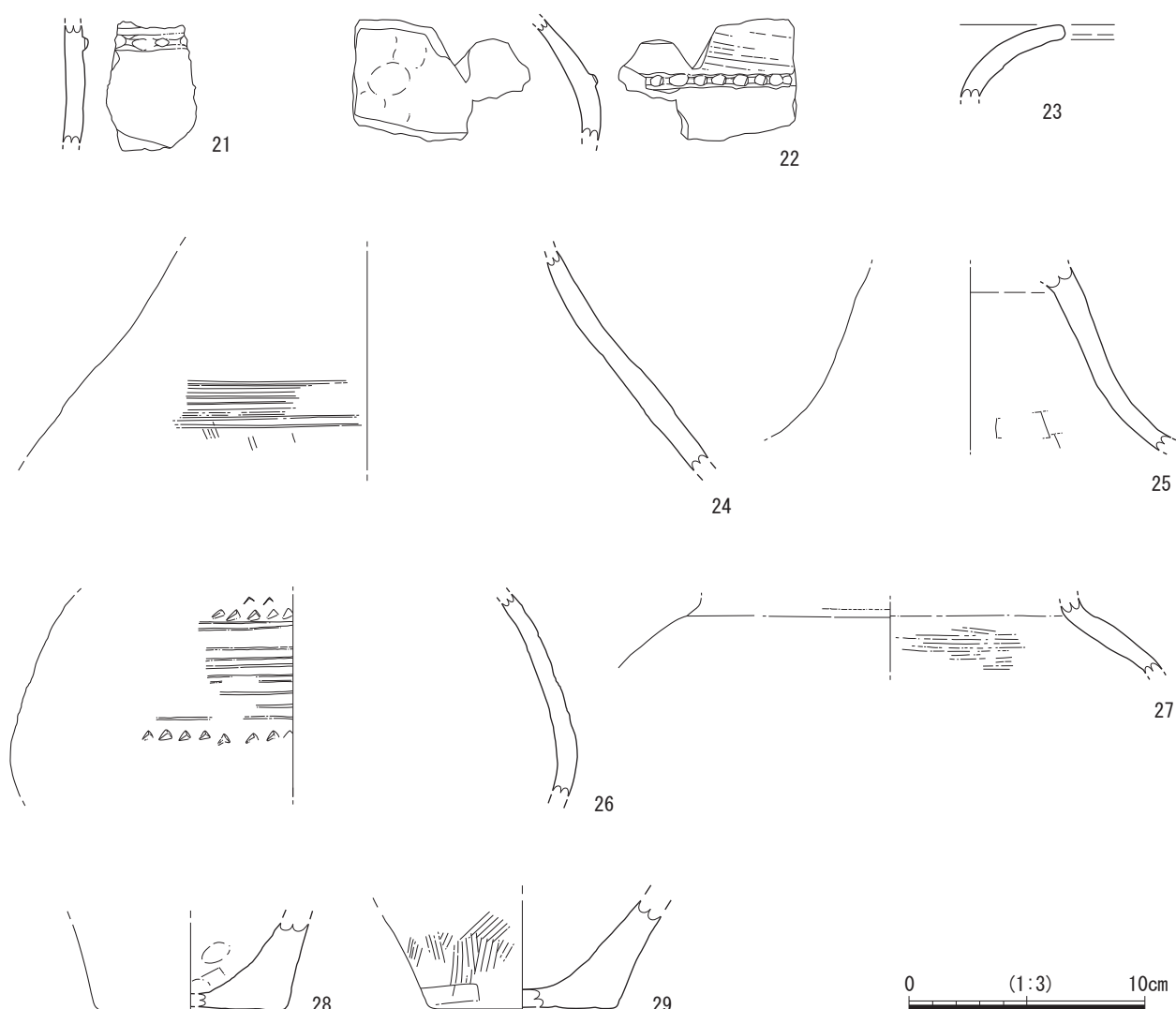
6・7層出土遺物 (第108図、図版8) 30・31は弥生土器である。30は胴部片であろうか。刻目を有する貼付突帯文をもつ。内面調整はナデである。弥生時代Ⅰ－3・4様式に相当する。31は壺の底部と考えられる。外面調整は刷毛目のちミガキである。胎土には砂粒が多く含まれる。弥生時代Ⅰ様式と考えられる。

6層出土遺物 (第109図、図版9) 32は朝鮮半島無文土器時代後期の円形粘土帯土器に影響を受けた土器の可能性がある。内外面にはわずかに刷毛目の痕跡がみられる。口縁部の粘土帯は貼付けられた痕跡がみられる。粘土帯上にわずかにユビオサエが残る。弥生時代Ⅰ－3・4様式前後であろうか。33は口縁部である。調整は内外面ともに刷毛目である。34・35は高杯の杯部あるいは鉢であろうか。34は内外面が風化しており、調整は不明である。35の内面調整はミガキが部分的に残る。外面は風化し調整は不明である。36～38は弥生土器の底部である。36の底部復元径は8.8 cmである。調整は外面が刷毛目のちナデ、内面はナデ、ユビオサエがみられる。37の底部径は6.7 cmである。38は上底状を呈する。底部径は6.7 cmである。外面は刷毛目、内面はミガキである。36～38の時期は弥生時代前期から中期と考えられる。

39は須恵器の甕頸部とみられる。調整は外面がタタキ、内面は回転ナデと、ミガキ状の不明調整がみられる。

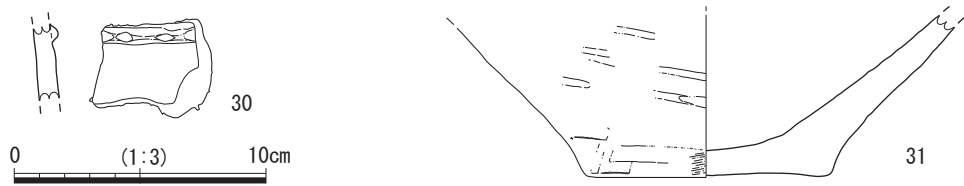
基本層序で述べたように、6層は基本的に7層と同層であり、その形成時期は弥生時代Ⅰ－2～3・4様式に位置づけられる。そのため、33～35・39などは5層以上の包含層や遺構からの混入と考えられる。

4層出土遺物 (第110図、図版9) 40は古代の土師器甕であろうか。復元口径は20.0 cmである。口縁部は長く外反する。口縁端部内面はナデによって浅い凹線状を呈する。頸部内面の屈曲部分には稜を有する。41は高杯の杯部もしくは鉢と考えられる。碗形を呈し、口縁端部付近はわずかに外反する。復元口径は19.6 cmである。内面調整はミガキが一部にみられる。弥生時代Ⅴ～Ⅵ様式



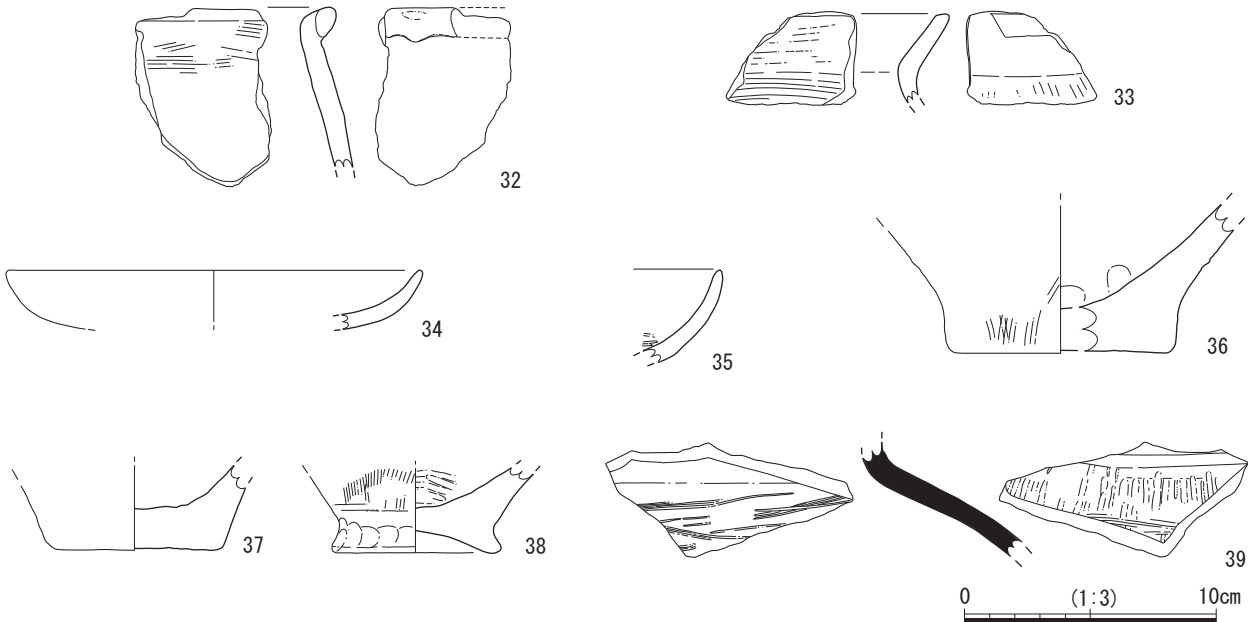
番号	層	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土
			口径	底部	器高			
21	7層	弥生土器・胴部	—	—	—	1条貼付突帯文/ナデ	にぶい黄褐10YR6/4/ にぶい橙7.5YR6/4	細、石英、長石
22	7層	弥生土器・胴部一壺	—	—	—	1条貼付突帯文、刷毛目/ ユビオサエ	にぶい黄褐10YR6/4/ にぶい黄褐10YR6/4	小、長石
23	7層	弥生土器・口縁部一壺	—	—	—	— / —	にぶい黄褐7.5YR6/4/ にぶい黄褐7.5YR6/4	細、長石、角閃石
24	7層	弥生土器・胴部一壺	—	—	—	8条篋描沈線文、刷毛目/ ナデ	橙5YR6/8/橙5YR6/8	細、長石
25	7層	弥生土器・蓋	—	—	—	— / ナデ	にぶい橙7.5YR7/4/ にぶい橙5YR6/4	細、長石、角閃石
26	7層	弥生土器・胴部一壺	—	—	—	2段三角形刺突列点文、10条 篋描沈線文、1段三角形刺突 列点文 / —	明褐7.5YR5/6/明褐5YR5/6	小、長石、角閃石
27	7層	弥生土器・頸部一壺	—	—	—	刷毛目、ナデ/刷毛目、ナデ	にぶい橙5YR5/4/ にぶい橙5YR5/4	細、長石、雲母
28	7層	弥生土器・底部	—	8.0	—	— / ナデ、ユビオサエ	明褐5YR5/6/ 明褐5YR5/6	小、長石、角閃石
29	7層	弥生土器・底部	—	8.0	—	刷毛目、ナデ/ナデ	にぶい橙7.5YR6/4/ にぶい橙7.5YR5/4	小、長石

第107図 7層出土遺物



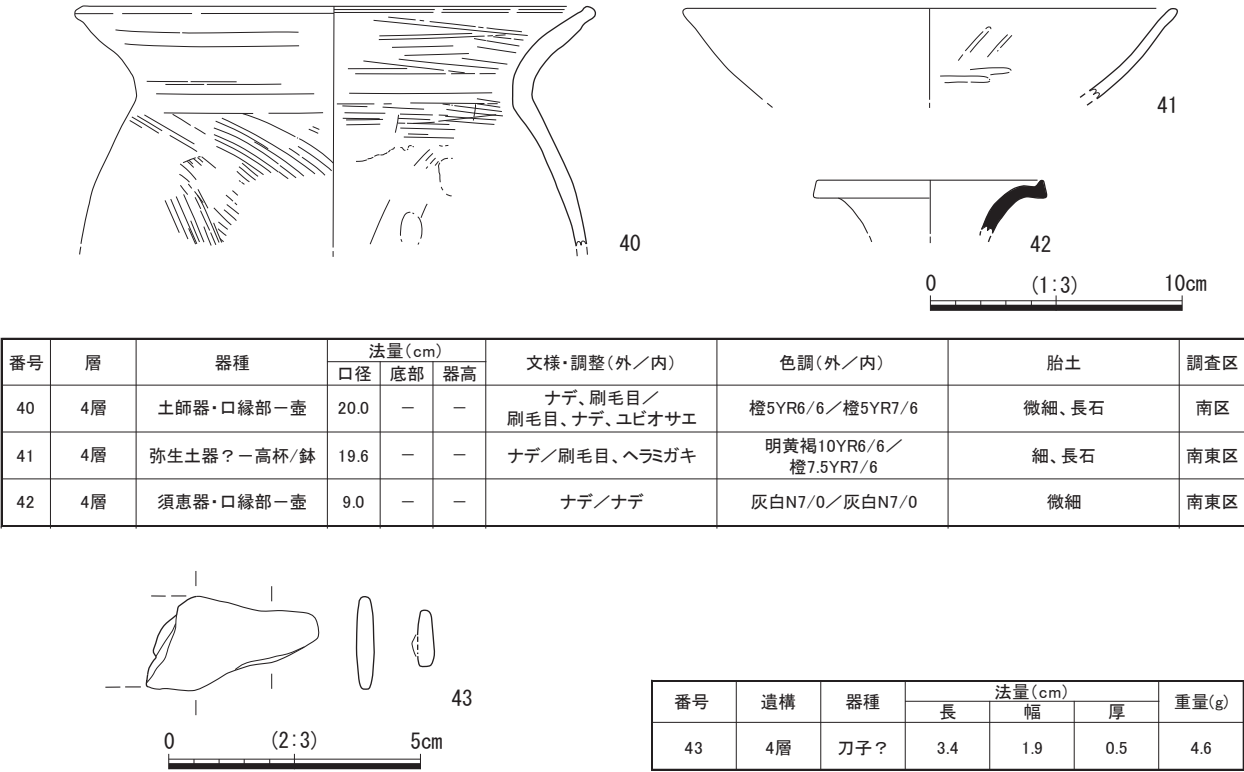
番号	層	器種	法量(cm)			文様・調整(外／内)	色調(外／内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
30	6・7層	弥生土器・胴部	—	—	—	1条貼付突帯文／ナデ?	橙7.5YR6/6／橙7.5YR6/6	小、長石	南東区
31	6・7層	弥生土器・底部一壺?	—	9.8	—	刷毛目、ミガキ／—	にぶい橙5YR6/4／ にぶい橙5YR6/4	小、長石	南東区

第108図 6・7層出土遺物



番号	層	器種	法量(cm)			文様・調整(外／内)	色調(外／内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
32	6層	朝鮮半島系無文土器・ 口縁部一壺	—	—	—	刷毛目／刷毛目	明赤褐2.5YR5/8／ 明褐7.5YR5/6	小、長石	南東区
33	6層	弥生土器／土師器・ 口縁部一壺	—	—	—	刷毛目／刷毛目	橙7.5YR6/6／橙7.5YR6/6	微細、長石	南東区
34	6層	弥生土器／土師器・ 口縁部一高杯／鉢	16.5	—	—	—	橙5YR6/6／橙5YR6/6	微細	南東区
35	6層	弥生土器／土師器・ 口縁部一高杯／鉢	—	—	—	—／刷毛目、ミガキ	橙7.5YR6/6／橙5YR6/6	微細	南東区
36	6層	弥生土器・底部	—	8.8	—	刷毛目、ナデ／ ナデ、ユビオサエ	橙5YR6/6／ 明赤褐5YR5/6	小、長石、角閃石	南東区
37	6層	弥生土器・底部	—	6.7	—	—	にぶい黄橙10YR6/4／ にぶい褐7.5YR5/3	小、長石、角閃石	南東区
38	6層	弥生土器・底部	—	6.7	—	刷毛目、ナデ、ユビオサエ／ ミガキ	橙5YR6/6／橙5YR6/6	小、長石	南東区
39	6層	須恵器・頸部一壺	—	—	—	タタキ、ナデ／ナデ	灰白N7/0／灰白N6/0	微細	南東区

第109図 6層出土遺物



第 110 図 4 層出土遺物

であろうか。

42 は須恵器の壺口縁部と考えられる。復元口径は 9.0 cm である。口縁部は外反し、端部は上方に肥厚する。口唇部は面をなす。平城宮Ⅵ前後で、実年代は 8 世紀後半とみられる。

43 は鉄製刀子であろうか。時期は不明である。

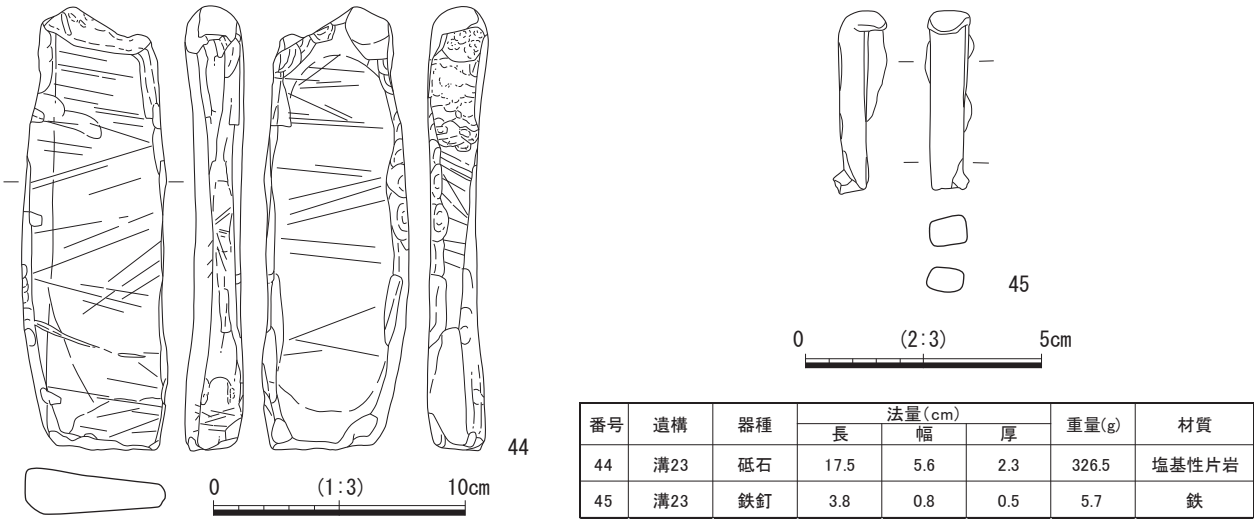
4．第 1 遺構面の遺構と遺物

(1) 溝

溝 23（第 78・86・111 図、図版 9） 西区の南端に位置し、南西—北東方向にのびる。溝の北側のみを検出している。近世に相当する 3 層中で検出され、検出面の標高 2.45m である（第 78 図）。残存長 5.5m、幅 1.2～2.5m、底面の標高 1.8～2.3m で、検出面からの深さ 15～65 cm であり、南へ向かうにつれて深くなる。埋土は単層である。

埋土から、土師器・須恵器・磁器片、砥石、鉄釘などが出土している。44 は砥石である。側面をみると、上下端が厚く中央部に向い薄くなる。石材は塩基性片岩である。45 は鉄製の和釘で、時期は近世である。

本溝の所属時期は検出層位・出土遺物から近世と判断される。



第111図 溝23出土遺物

5. まとめ

本調査地点は、555 m²と狭い調査面積であったが、重要な成果を得ることができた。

第3遺構面で検出された溝28～30・32は、弥生時代Ⅰ－Ⅱ様式の用水路である可能性が高い。本調査地点の北東に位置する第26次調査地点（大塚講堂改修地点、第4章）においても、同時期と考えられる溝1～3が検出されており、これらは一連の用水路であった可能性がある。また、本地点の南に位置する第27次調査地点（立体駐車場新営地点）では、旧河道から分岐し北流する溝（用水路）を確認している（端野ほか2015）。溝の底面の標高に注目すると、第27次調査地点は2.1mで、その北に位置する本調査地点は1.7～1.9m、さらに北東に位置する第26次調査地点は1.2～1.3mである。これらの値からみて、第27次調査地点の旧河道を基点に、南から北東方向への用水路群の水流が復元される。この復元が正しいとすれば、本遺跡の北東域にも弥生時代Ⅰ－Ⅱ様式の水田域が存在する可能性が考えられる。

第2遺構面では8世紀代と考えられる掘立柱建物を検出した。これに関連する柱穴や周辺の土坑からは、8世紀代の須恵器杯蓋に加え、近畿産土師器を模倣した暗文をもつ皿が出土している。暗文土器は官衙関連施設において使用された可能性が指摘されている（早淵2015など）。なお、本調査地点の西側に位置する庄遺跡・加茂名中学校地点の掘立柱建物や竪穴住居、土坑から、類似する暗文土器や須恵器が出土している点（勝浦1996）は注目される。

（脇山）

文献

- 端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治，2015. 庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場地点）の成果. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1, 43-97.
- 早渕隆人，1999. 徳島県内における古代土器様相：川端遺跡出土土器の位置づけ. 金泉寺遺跡・川端遺跡：徳島県中央構造線断層帯調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第32集. 徳島県埋蔵文化財センター，徳島，pp.122-129.
- 早渕隆人，2015. 阿波国古代南海道：官衙関連遺跡からの推定. 徳島県埋蔵文化財センター紀要真朱11, 57-70.
- 北條芳隆（編），1998. 庄・蔵本遺跡1：徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査，徳島大学埋蔵文化財調査報告書第1巻. 徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島.
- 勝浦康守，1996. 庄遺跡：学校施設建設工事，徳島市埋蔵文化財発掘調査概要6. 徳島市教育委員会，徳島.
- 中村豊，2000. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年. 田崎博之（編），突帯文と遠賀川. 土器持寄会論文集刊行会，愛媛，pp.471-498.
- 西弘海，1986. 土器様式の成立とその背景. 真陽社，京都.
- 大西浩正（編），1990. 黒谷川郡頭遺跡Ⅴ. 徳島県教育委員会，徳島.
- 定森秀夫・中村豊（編），2005. 庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書. 徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島.
- 菅原康夫・瀧山雄一，2000. 阿波地域. 菅原康夫・梅木謙一（編），弥生土器の様式と編年，四国編. 木耳社，東京，pp.11-130.